傘の下にて

〈登場人物〉

英雄（平野英雄）　二六歳
真紀（小沢真紀）　二七歳
弘三（山口弘三）　八二歳
聡子（山口聡子）　七七歳
琴子（戸田琴子）　三三歳
橋本（橋本透）　二十歳
宮坂（宮坂清源）　五八歳

1

雨音。

明り入ると、『白浪五人男』の稲瀬川勢揃いの場よろしく傘をさして並ぶ男女。ただしここでは四人。黒い蝙蝠傘の布の部分にはいくつも穴があいていて、まるで小型のプラネタリウム。

上手より山口弘三、戸田琴子、山口聡子、橋本透。拍子木。口上。

橋本　さてあなたの人生の終り、ジ・エンドはいつやってくるのでしょう。二十年後？十年後？　一年後？　もしかして明日かも。いや今晩かも。ともあれ間違いなく誰にも終りはくるのですから、生きているときと同様死後も自分の席を確保しなければなりません。席がとれなければ立ち見になります。立ち見は足が疲れます。当日券は入手困難ですから、前売りを買っておくことをおすすめします。そこで耳寄りなお知らせ。あなたの死後のＳ席を格安で提供する魂の劇場。その名も『メモリアルパー

ク・虹』。緑豊かな自然に囲まれた霊園をあなたの最後の舞台に。

弘三　入会金以外一切頂きません。永代供養。管理料なし。永遠に居続けて下さって構いません。今日日永遠を保証する商品やサービスがあるでしょうか。周りに海も川も活火山も危ない発電所も工場もなく、航空路からはずれ、活断層も通らぬ小さな丘にそれはあります。たとえ大地震や大嵐があっても、大地にこんもり盛りあがった丘は未来永劫存在し続けるでしょう。宇宙から隕石か人工衛星でも落ちてこない限り、あなたの眠りを妨げることはありません。永遠の安眠をお約束する『メモリアルパーク・虹』。静寂に包まれたやすらぎの霊園をあなたの終の住みかに。

聡子　冷たく硬い石の標のかわりに木の苗を植えるのです。大木になるのは困るけど、あなたのお好きな木を植えて下さい。できたらきれいな花が咲き、できたらかわいい実のなるような、できたら素敵な香りがして、できたら生きていた頃のあなたを思わせる、そんな木を一本。地中に埋めたあなたの魂はその木が育つとともに地表に現れることでしょう。葉になって花になって、鳥を誘い、虫と遊び、雨と語り風と歌い、お天道様に向かって祈ります。春夏秋冬繰り返す夢の続きのような場所、『メモリアルパーク・虹』。四季折々の彩り美しい霊園をあなたの王国の庭に。

琴子　小さな壺があなたの魂の容れ物です。大事なものを入れましょう。かけがえのないものを入れましょう。生きてきた証を入れましょう。滅んでしまった肉体の燃え滓なんぞでなく。他人にはがらくたでも、あなたには黄金にまさる値打ちがあるもの。それは家族の写真でしょうか。しまっておいた母の日のプレゼント。銀婚式にもらった指輪。お父さんの似顔絵。手編みの手袋。戦地からの手紙。勤続二十年のメダル。借

りたままの詩集。浜で拾った貝殻……幾千のタイムカプセルを納めた『メモリアルパーク・虹』。忘却のかなたに沈む霊園をあなたの記憶の栞に。

雨音、強くなる。
溶暗。同時に赤ん坊の泣く声。
『桜姫東文章』、三囲の場の唄を重ねて。
〽身にしむる雨にうきめを三囲の
雨音も泣き声も一段と激しく。
暗転。

2

五月。午後二時頃。
平野英雄の叔母、佐倉稲子の家。
古い民家のつくり。縁側に上がり込んでいるのは宮坂清源。作務衣姿。

宮坂　とにかくお墓は困る。
英雄　……。
宮坂　お墓は困る。
英雄　あれはお墓では……。
宮坂　メモリアルパークって霊園だろ。共同墓地だ。
英雄　メモリアルパークですが、共同墓地とかいうんでなくて。
宮坂　霊園ってのはお墓のこと。
英雄　確かに霊園という言葉も使いましたが。
宮坂　御遺骨、納めるんだろ？
英雄　遺骨は納めないつもりです。
宮坂　それじゃ霊園じゃないじゃない。メモリアルパークじゃないじゃない。
英雄　散骨ぐらいはしてもいいかなと。
宮坂　散骨するの！
英雄　散骨には埋葬許可証とか、役場の手続きがいるんですよね。
宮坂　おいおい、散骨はよしとくれ。
英雄　どうしてですか？

宮坂　骨を撒くなんて罰あたりだ。それに遺灰が舞って環境に……。

英雄　あの近くには畑なんてないし、家だってないじゃないですか。

宮坂　灰ってのは軽くて、遠くまで飛ぶんだ。

英雄　ダイオキシンじゃないし。

宮坂　気分の問題だよ。ただの灰じゃない。

英雄　気持ち悪いっていうんですか。

宮坂　……。

英雄　汚れたものみたいに。

宮坂　そんなこといっとらん。焼かれてるんだから浄められてる。だが散骨は……。

英雄　自然に還すんですから。

宮坂　散骨公園にするの？

英雄　そういうつもりでは……。

宮坂　わしが坊主だからじゃないし、村会議員だから言ってるわけでもない。これは村の連中の、いわば村の総意だ。みんな、あんたのすることを……。

小沢真紀、宮坂にお茶を出す。

真紀　どうぞ。

宮坂　あ、こりゃどうも。

英雄、余計なことをという顔。

宮坂　（真紀に）薪、たいへんでしょ。

真紀　え？

宮坂　火をつけるの、たいへんでしょ。ここ薪だから。

真紀　あ、その、まき（自分の名前を言われたのかと勘違い）。

宮坂　佐倉さん、煮炊きも風呂も全部薪だったから。山に行きゃいくらでもくべるものはあるけどね。プロパンの配達、あるんですよ。薪じゃ都会の人はたいへんだ。

真紀　都会じゃないです。

宮坂　電気はきてるからガスでなくても。

英雄　電話線、きてなかった。

宮坂　この家、電話なかったから。役場からの連絡もたいへんでね。この先の大野さんに取りついでもらってたけど、あそこだってじじばば二人。ここまでは結構ある。おまけに坂だ。年寄りにやきつい。緊急連絡は村内放送があるが、年寄りにはちゃんと届いているのかあやしいもんだ。

英雄　……（意味がわからない）。

真紀（英雄に）耳が遠くなるから。

宮坂　そういうこと。

英雄　電話は先週やっと。

宮坂　でもここ、携帯通じるし……（座敷の奥にあるパソコンをさして）そいつだってちゃんと使えるだろ。

英雄　ええ、まあ。

宮坂　こんな田舎でもインターネットで世界とつながってる、すごいよね……今じゃ寺も法事のお知らせなんてメールで送るらしい。いちいち覚えてなくても自動的に送信できるわけ。〝今年はお父さんの三回忌です。御準備はよろしいですか〟なんてさ。檀家の管理ソフトもあるし。今、ホームページのない寺なんて少ないんじゃないか。

英雄　おたくにも？

宮坂　いや、でもパソコンぐらいあるよ。だからここのホームページも検索できたんだ……あれ、自分でつくったの？

英雄　つくってあげましょうか。

宮坂　いいよ、うちなんて檀家、三百戸くらいしかないんだから。それもどんどん減って……この村の高齢化率、すごいよ。六十五歳以上が七割だ。このままだと十年もたてば村の人口は半分になる。

真紀　半分ですか。

宮坂　半分よりもっとかも。

英雄　そして誰もいなくなる。

宮坂　冗談じゃなく、そういう日がくるかもしれん。わしが子供の頃は中学校もあったんだ。小学校は分校があるが、それだって生徒は五人、再来年には廃校になる……だ

からあんたらみたいな若い人には。

英雄　若くないです。もう二十六です。

宮坂　若いよ。二十六が若くなくて誰が若いっていうの……昔は若いことなんて何の値打もなかった。それがどんどん若さってのが値上がりして。円高みたいに。田舎では若いっていうだけでもてはやされる。少々馬鹿でも根性悪くても、田舎じゃ若造が威張ってるよ。そのかわり年寄りは二束三文、粗大ごみだ。

英雄　（つぶやく）何もそこまで。

宮坂　赤ん坊がね。

真紀　え？

宮坂　三月に生れたの、村で。

真紀　ああ……。

宮坂　赤ん坊なんて二年ぶり。それも男の子。もうお祭りよ。村をあげてお祝い。わしの子どもの頃なんてまだ貧しくてさ、間引きなんてのがほんとにあった。それがまるで殿さまの世継ぎでも生れたみたいに（笑）……だから村としては、若い人、大いに歓迎なのよ。

英雄　僕らのことですか？

宮坂　みんな喜んでたんだ。佐倉さんとこの空き家に甥っ子だっていう若い夫婦者が来てくれたって。でも心配してた。来てくれるのはいいが、一体何をするんだろうねって。この村で働くところなんて役場と農協と郵便局くらいだ。農協も出張所だし、局も家族で細々やってる……そしたら、あれだ、あの。

英雄　あれ。

宮坂　そう、あれ。

英雄　あれがみなさん、お気にめさない。

宮坂　茸の化け物みたいのが。

英雄　茸の化け物……。

宮坂　茸じゃないの？

英雄　茸に見えますか。

宮坂　茸だろ、ありゃ。

英雄　あれは……。

宮坂　丘の上に突然あんなものをつくりはじめるから、みんなびっくりするわけさ。そうだろ。ろくすっぽ挨拶もなく、いきなり茸の化け物だもの。みんなさ、お祭りとはいわんが、ささやかな歓迎会くらいするつもりでいたわけだ。それが何だか……。

英雄　役場にはちゃんと挨拶に行きました。大野さんでしたっけ、この先に住んでらっしゃる。そこへも二人で顔を出して。

真紀　……（頷く）。

宮坂　田舎なんだから、ああいうことするときはちゃんと説明してくれなきゃ。

英雄　モニュメントです。

宮坂　え？

英雄　あの茸は……モニュメントなんです。メモリアルパークの。

宮坂　モニュメント？　看板とは違うの？

英雄　象徴的な……シンボルというか。

宮坂　シンボル？　ああ、シンボルね。そういえばわかる。シンボルか（にやついて）。

英雄　あの……。

宮坂　向こうのお山にね、お社があるんだけど、その奥宮にも同じのが奉納されてるんだ。あれよりもずっと小ぶりだが。

英雄　何がですか？

宮坂　シンボルだよ。これくらいの太さでな。（手で示す。直径五十センチほど）長さはわしの背丈くらいあるかな。何の木だろ。彫られたのは江戸時代かな。子宝に恵まれるってんで、嫁さんがそっとお参りにいってな、こうやってまたがって、先っぽに股ぐら擦りつける（しぐさ）……子供ができたら安産祈願、無事生れたらお礼参り。

英雄　（声をひそめ）シンボルって、あれのことですか。

宮坂　シンボルといえば普通、あれだろ。

英雄　違いますよ。

宮坂　だって茸じゃない。

英雄　茸じゃないです。

宮坂　そりゃまあ、あんたのは霊園のあれな

んだから、お宮のあれとは目的が違うだろうけど、喩えればああいう類だろ？

英雄　まあ……。

宮坂　しかし大きいね、あれ。

英雄　未完成なんです。

宮坂　もっと大きくなるの？

英雄　大きくなるというより、もっと広がるというか。

宮坂　それはいいけどさ。とにかく困るんだよな……お墓は困る。

英雄　お墓というわけじゃ。

宮坂　だって霊園でしょ。

英雄　お墓じゃないです。

宮坂　メモリアルパーク、何だっけ？

英雄　メモリアルパーク、虹。

宮坂　虹って、あの虹？　七色の？

英雄　ええ。

宮坂　メモリアルパーク、虹か。何か儚そうだな……で、茸とどういう関係があるの？

英雄　茸じゃないですよ。

宮坂　とにかく、あんたが……その。

英雄　平野です。

宮坂　平野さんがあの地所をもらったわけだ。叔母さんの、佐倉稲子さんから。

英雄　はい。

宮坂　だからそれをどう使おうが勝手なわけなんですが……勝手なわけなんだが、この村に住みつくのなら、少しはまわりのことも気にかけてほしい。そりゃあそこに何かつくるのは難しいとは思うよ。けどさ……ほかに何か考えつかなかったの？　メモリアルパーク以外に。

英雄　……散骨しませんから。

宮坂　考え直してくれる？

英雄　骨でなければいいんでしょ。もともとそういうつもりでしたから。

宮坂　じゃ何を納めるの？

英雄　その人が残しておきたい。メモリアルな、その人らしい、何か、大事なもの……ホームページにも書いときましたが。

宮坂　それで嵩張らなくてすむもの。

英雄　そうです。そういうものを何か小さな壺のような容器にいれて。

宮坂　壺に入れて埋めるの？

英雄　ええ。

宮坂　骨壷みたいな？

英雄　骨は入れませんから。

宮坂　まあ、そういうことなら、いわゆるお墓じゃないんだし、村としてはたぶん問題はないと思うけど……でもそれはそれで大丈夫なの？　お客さんに対して。

英雄　入会者のことですか。

宮坂　入会者にはっきり説明しとかないと、後でもめるよ。遺骨、納められるって誤解する人も絶対いるから。詐欺だなんていう人もきっと出てくる。

英雄　詐欺……。

宮坂　それと、余計なお世話かもしれないが、どんなスタイルの霊園にしろ、こんな辺鄙なところへ客がくるかね。交通の便は悪いし。近くに観光地もないし。中には、静かでいいって人もいるかもしれんが。

英雄　……。

宮坂　看板、立てないの？

英雄　え？

宮坂　看板。シンボルもいいけど、ちゃんとした看板がないと来る人が迷っちゃう。

英雄　まあ、そのうちに……。

宮坂　じゃ、また……ケチをつけにきたみたいだけど、こちらとしてはほんとに仲よくやりたいんだよ、ほんとに……（真紀に）奥さん、どうもごちそうさま。

宮坂、退場。

真紀　奥さんだって。

英雄　冗談じゃねえな（ごろっと横になる）。

真紀　ごめんね。

英雄（あわてて起き上がり）冗談じゃないって、いまの坊さんのことだよ。

真紀　仲よくやりたいって。

英雄　商売敵だと思ってるのかな。どうせこの村の連中なんて入らないのに。

真紀　村の人は入れないの？

英雄　そんなことないけど、ここらは庭先に先祖代々のお墓があるんだし。

真紀　叔母さんのお骨はどうするの？

英雄　叔母のはあそこに埋めるよ。叔母の土地なんだし。遺書にも指示があったし。

真紀　あそこに……。

英雄　それはいいんだけど、何だか意味がわからない箇所があってさ、遺書に。

真紀　わからないの？

英雄　「遺骨は剣のつけねに埋めること」

真紀　何、それ？　謎々？

英雄　剣といわれても（振り回すしぐさ）……何のことやらさっぱり。

真紀　散骨、駄目みたいね。

英雄　どうしようかな。お客さんのニーズ、いまいちわからないし。

真紀　御住職、詐欺になるかもって。

英雄　出たとこ勝負でやってるからなあ。

真紀　英ちゃん、跳んでから考えるタイプだものね。

英雄　うん。

真紀　全然考えてないかも。

英雄　そりゃない（笑）。

真紀　だって、そうじゃない。

英雄　子供の頃から計画性とは無縁の男なんであります。自慢じゃないが、夏休みの宿題が間に合ったことない。

真紀　自慢じゃないよ（笑）。

英雄　……あんな土地もらったのが間違いだったかも。

真紀　……。

英雄　叔母といったって、子供の頃に二、三度会っただけ。おふくろとあんまり仲よくなかったのかな。葬式にも来なかった。二人っきりの姉妹なのに。

真紀　子供、いなかったの？

英雄　赤ん坊の頃に亡くなったんじゃなかったかなあ。旦那さんも何をやっているのかよくわからない人で。

真紀　その人は？

英雄　知らない。正式に結婚してなかったみたいだし。

真紀　……。

英雄（しまったという顔）だから僕が相続したんだけど。

真紀　……写真もないの。

英雄　最後に会ったのが十年以上も前だから顔もぼんやり。でも黒子だけは覚えてる。

真紀　黒子？

英雄　胸のこのあたりに、こういう感じに（Wを描く）大きな黒子が並んでるんだ。カシオペアみたいに。

真紀　カシオペアって、星座の、あれ？

英雄　Wの形の秋の星座。カシオペアってのはエチオピアの王妃で、高慢がたたって娘のアンドロメダが生贄にされるんだ。それを助けたのが……。

真紀　一緒にお風呂にでも入ったの？

英雄　え？

真紀　だって、（胸をさし）ここなんでしょ？

英雄　忘れちゃったよ。

真紀　英ちゃん、天文少年だったとは。

英雄　小学生の頃にちょっと。

真紀　無限の宇宙に想像力の翼をはばたかせていたわけだ。

英雄　背中にさ……。

真紀　背中？

英雄　いや、なんでもない。

真紀　ここ、星空もすごくきれいじゃない。天体観測でもしようか。

英雄　……したんだよ。

真紀　え？

英雄　天体観測。叔母さんの旦那とあの丘の上で。あれがあの人と話した最初で最後。

真紀　何を話したの？

英雄　その人、北極星の探し方を教えてくれ

てさ。（宙に描きながら）カシオペアのWのこの線とこの線を延長して交わった点と真ん中のこの星を結んで、それを北に五倍伸ばすと北極星が見つかる。

真紀　……英ちゃん、後悔してる？

英雄　……。

真紀　関係ないのに巻き込んじゃった。

英雄　そんなことないよ。

真紀　東京でデザインの仕事、さがした方がよかったんじゃない。

英雄　デザインの仕事なんて今ないよ。やりたくもないし。

真紀　英ちゃん、アーティストだしね。

英雄　教職とっておけばよかったかな。美術の教師でもやりながらこそこそ作品をつくるなんてのが。

真紀　高校の時そういう先生、いたね。

英雄　生徒には変人扱いされて、コンクールに出品してもなかなか芽が出ない。

真紀　似合ってるかも。

英雄　そういや生徒に手を出して子供ができちゃったのがいたな。

真紀　……。

英雄　ごめん。

真紀　……ここがなかったら。

英雄　え？

真紀　どうなったかしら。

英雄　どうなったかな……。

真紀　きっと、どうにもならなかった。

英雄　うん。

真紀　どうにも……。

英雄　僕、親父もおふくろも亡くなってるし、兄弟いないし。おふくろの関係はこの叔母さんだけ。親父の方の親戚はいるけれど、全然つきあいない。

真紀　……。

英雄　ホームがないんだ。これがほんとのホームレス。だからここがホーム。霊園なんて思いついたのも、ここを僕のホームにしたかったからかも。

真紀　他に考えつかなかったのかって。
英雄　そうだよな、霊園だものな(笑)。
真紀　でもメモリアルパークって、素敵な言葉だよ。メモリアル……パーク。
英雄　ここがなきゃ、菅原さんも。
真紀　……うん。
英雄　あんな土地もらったの間違いだったなんていったら罰があたるな。
真紀　あたるよ。
英雄　……あれ、茸だってさ、ひどいよな。茸に見えるのかな。
真紀　(微笑んで)。
英雄　あんな大きいのつくるの初めてだから。
真紀　ごめんね。
英雄　……。
真紀　こんな居候がいて。
英雄　……薪、つらいよね。
真紀　え？
英雄　プロパン、頼もうか。
真紀　私のことかって。
英雄　真紀さん、つらい？
真紀　……。
英雄　つらい？
真紀　そんなこと言ってられない。
英雄　うん。
真紀　英ちゃんの叔母さん、ここでずっとやってきたんだ。
英雄　ああ。
真紀　ねえ、あの山の奥宮ってところ、私、行ってみたい。御住職が言ってたじゃない。お社があるって、安産祈願の。
英雄　あ、あれ……でも、あれ。
真紀　御利益あるんでしょ。
英雄　でも、あれは……。

山口弘三と聡子、連れ立ってくる。

弘三　ここで聞いてみるか……すみません。
真紀　はい。
弘三　ちょっとうかがいます。メモリアルパ

ーク虹。というのはこのあたりで？

真紀　英ちゃん……。

英雄　この裏手をあがった丘の上になります。

聡子　やっぱりそうでしょ。

弘三　看板ぐらい出してほしいな。

聡子　見逃したのかしら。

弘三　事務所が（地図を見せながら）ここらのはずなんですが、どうもそれらしきものが……御存じですか？

英雄　ええ。

弘三　もっと遠いんですか？

英雄　いえ。

弘三　近く？

英雄　ここです。

弘三　ここ？

英雄　ここです。

弘三　（聡子に）おい、ここなんだって。

聡子　でしょ。私はこんな感じだと思いました。だってこんな田舎だもの、プレハブの事務所なんておかしいわよ。

英雄　ここが私どもの住居兼事務所ということで。

聡子　あなたが霊園の社長さん？

弘三　社長さんってのはないだろ。

聡子　会社じゃないんですか。

英雄　会社にはなっていませんが、ゆくゆくはそういうことも。

聡子　いえ、いいんですよ。会社じゃなくたって。私たちそういうこと気にしてるんじゃないのよ。大事なのは中身ですもの。（弘三に）ねえ？

弘三　株式会社だからといって信用できるものでもない。

英雄　平野といいます（名刺を出す）。

弘三　山口です。引退しているので名刺はないです。こっちは家内。

聡子　（名刺を読む）メモリアルパーク虹、管理人、平野、英雄（えいゆう）。

弘三　えいゆうってことはない。ひでおだ。

聡子　平野、英雄（ひでお）。

弘三　大リーグで活躍した野茂英雄と同じ。
聡子　平野さん、おいくつ？
英雄　二十六です。
聡子　お若いわね。いえ、いいんですよ。別にそういうこと気にしてるんじゃないの。霊園なんて、そういう関係のお仕事ってもっと年配の方がやるのかなって、こっちの勝手な思い込み。
弘三　ＩＴベンチャーの社長って感じだね。
聡子　ベンチ屋って？
弘三　起業家。
聡子　管理人か……もっと重々しい肩書きのがいいんじゃない？
弘三　代表とか。
英雄　いやそれは……。
弘三　管理人というとマンションの管理人しか思い浮かばんからなあ。
英雄　ネットの管理人なんてのもありますよ……ここ、ホームページを見られて？
弘三　そうです。
聡子　すごいでしょ。うちの人、八十なのにパソコンつかえるのよ。
弘三　すごかないよ。
英雄　いえ、すごいです。
弘三　で、一度電話をかけてから来ようと思ったら番号が載ってないし。
英雄　すみません。ここ、電話が通じたの最近で……。
弘三　それでいろいろ想像するより、現地へ行ってみた方が早いと。
聡子　私たち、せっかちだから。
弘三　ただ、この地図はよくわからなかった。
英雄　すみません。
聡子　ここ、ホームページでしか紹介してないの？
英雄　今のところは。
聡子　でも霊園なんて私たちのような年寄りが中心でしょ。それだとパソコン使える人、少ないわけだから。
英雄　宣伝方法がよくない。

聡子　お手紙の方がいいわ。

弘三　ダイレクトメールか。

英雄　郵送料かかるし、名簿を手に入れるのたいへんなんです。何だかんだいってホームページが一番安上がりなんで。

弘三　なるほど。

聡子　で、私たち何番目？

英雄　え？

聡子　ここに訪ねてきた中で。

英雄　メールでの問い合わせは十数件ありました。そちらへ行ってみたいという方もいましたが、その後、連絡がありません。

弘三　冷やかしだな。

英雄　公開して一か月もたっていませんし。だから、お二人が初めてです。

聡子　初めてですって。

弘三　そうか。

聡子　うれしいわね。病院の予約だって一番はうれしいもの。

弘三　ここは交通の便がいいとはいえないから、気軽にのぞきにくるというわけにはいかんのでしょうな。

聡子　うちから三時間かかったわ。ちょっとした小旅行。

英雄　すみません。

聡子　いいの、楽しかったわ。駅弁、美味しかったし。（弘三に）ねえ。

弘三　遠出はひさしぶりなんです。最近膝があれなんで。

真紀がお茶をいれてくる。

真紀　どうぞ。

聡子　すみません……奥さん？

真紀　いえ、その……。

弘三　おまえ、そういうこと。

聡子　さっき英ちゃんって。

英雄　あの……。

聡子　ご夫婦でも恋人でもいいの。別にそういうこと気にしてるんじゃないの。だって

こんなところに大勢従業員がいて、揃いの制服着てなんて、ちょっとあやしいでしょ。

弘三　いかにもビジネスでございってやつは、結局金儲け一辺倒だ。

聡子　だからご家族なんかで、こじんまりとやってらっしゃるところだといいなあって、この人と話してきたんです。

弘三　その方が安心できる。

英雄　そういうもんですか。

聡子　それでここの霊園なんだけど、いつ頃から入居できるの？

弘三　入居ってのはないだろ（笑）。

英雄　それがいろいろ未整備で。

弘三　マンションも完成予定のかなり前から募集するからなあ。

聡子　でも私たちのような年寄りはいつコロッといくかわからないでしょ。

弘三　ここへ来る途中に見えた、こういうの（茸の形を示し）ですが。あれ、こちらの。

英雄　モニュメントです。

弘三　モニュメントですか。

聡子　モニュメント？

弘三　シンボルだな。（英雄に）メモリアルパークのシンボルなんでしょ？

聡子　茸みたいな、あれ？

弘三　茸じゃないだろ。

英雄　やっぱり茸に見えますか。

聡子　このへん松茸がとれるの？

弘三　茸山の看板じゃないんだから。

聡子　茸でもいいじゃない。

英雄　モニュメントもまだ完成じゃないんです。もっと早くにと思ったんですが。

弘三　結構大きいですよね。

英雄　……これが完成図です（見せる）。

弘三　……ほお、こりゃ立派だ。

聡子　あら、これ茸じゃないわ。茸というより……。

弘三　つくりだしたら、思ったより手間も費用もかかった？

英雄　ええ、まあ。

弘三　（聡子に）おい。

聡子　私はオッケー。

弘三　少し協力しましょうか？

英雄　え？

弘三　私たちの申し込み分でいくらか足しになるでしょ。

英雄　申し込んでいただけるんですか？

弘三　気にいったら即申し込むつもりできたんです、なあ。

聡子　ええ。

英雄　内容的に煮詰まっていないところがあるし……ご遺骨のことなんかも。

弘三　遺骨？　ああ、遺骨なんてどうでもいい。そこらに撒いてくれてもいいし。

英雄　地元のお寺さんから散骨するのはやめてくれと。

弘三　ホームページには確か、霊園特注の容器の中に残したいものをいれて埋め……。

聡子　その上に好きな木の苗を植える、でしたよね。私、あの文句が気にいったの。ロマンチックで……あなた、何植える？

弘三　何でもいいよ。

聡子　やっぱり桜かしら。賑やかでいいわ。

弘三　桜はどうかな。

聡子　あらいけないの。

弘三　桜の木の下には埋まってる。

聡子　何が？

弘三　死体が。

聡子　あらいやだ、ほんとなんですか。

弘三　誰だっけ、安吾かな。

聡子　（真紀に）知ってた？

真紀　いえ……。

聡子　でも木の下に埋まっているのは骨じゃないんですよね。

弘三　だからここ、骨は埋めないんだよ。

聡子　骨になんかこだわらないわ。残したいとも思わないし。魂の休めるところならいいんだから。

弘三　私たちがここに来てみようと思ったのは、設備とか、規約とかそういうんじゃな

くて、何というか。

聡子　フィーリング。

弘三　そんな言葉よく知ってたな。

聡子　馬鹿にして。そう、こういうのってどんなにうまいことが書き連ねてあっても駄目。ハートに、心に響かなきゃ。そして一番大事なのが人。

英雄　人、ですか？

聡子　そこをどんな人がつくって、どんな人が運営しているかが一番大事。

弘三　早い話が、あなたたちが気にいったってことだ。

聡子　私たち、人を見る目はあるの。そういう商売してたから。

英雄　どんな御商売を？

弘三　まあ、それはいいじゃないですか……で、お金はあった方がいいでしょ。

英雄　助かりますが。

弘三　今日は持ち合わせていないが、すぐにでも振り込みますよ。

英雄　そんなに急がれなくても。

聡子　茸や、そのほかの霊園の整備の費用もいるだろうけど、あなたたちだって生活しなきゃならないでしょ。

弘三　この仕事に専念してもらいたいし。

聡子　お若いからそう蓄えがあるとは……ごめんなさいね、失礼なこと。

英雄　いえ、その通りで。

弘三　五十……確か五十万でいいんですよね。二人だから百万か。

英雄　あの、お二人なら七十……五十万で。

弘三　割引ってことですか？

聡子　それは駄目。

英雄　もっと引けと？

聡子　引いちゃだめなの。

弘三　どうもあなたはビジネスというものを御存じないな。その若さでは無理もないが。いいですか、この手のものに割引は禁物。決して負けてはいけない。せいぜい十回払いのローンぐらい。

聡子　スーパーで食品を買うのとは違うんだから、安いから買っておこうというものではないでしょ。割引なんてしたら価格そのものを疑われるわ。五十万といったら五十万、嫌なら結構です。そのくらいの姿勢でいいのよ、こういう商品は。

弘三　商品というか、サービスだな。

英雄　五十万は高くないですか？

弘三　コストがどのくらいで、利益をどれくらいに設定しているかわからんから何ともいえんが。

聡子　東京の郊外でお墓を買うことを考えればかなり安いんじゃない。

英雄　普通のお墓を買おうとは？

弘三　買えないわけではないんだ。近場に適当なのを見つけて、私が死んだら入れてもらい、それからこの人がとも思ったが。

聡子　あら、あなたが先とは限らないわ。

弘三　普通はそうだろ。私の方が五つも年上だし、だいたい女の方が寿命が長い。

聡子　私は血圧が高いし、血糖値だって。

弘三　私には不整脈があるし。おまえなんか結構顔色いいじゃないか。

聡子　わかりませんよ。明日ぽっくりいくかもしれない。

弘三　ああ、ぽっくりがいいな。病院でぐずぐず生かされるのはまっぴらだ。

聡子　まっぴらです。

弘三　どちらが先になるにしろ、問題なのは墓に入ったあと。私どもには子供もいないし、親戚とのつきあいもない。つまり、二人が墓に入ったら誰もきてくれない。

聡子　お盆だ、お彼岸だなんていったってお参りしてくれる人、いないわけでしょ。草ぼうぼうでみじめよね。

弘三　そんなのは草が生えないようにコンクリートで固めてしまえばいいんだが。

聡子　とにかく先々のこと考えたら、ああいうお墓なんていらないって。

弘三　こちらだったら、あとのことを考えな

くてもよさそうだし。

英雄　はあ。

弘三　まあ、死んだあとのことなんてほんとはどうでもいいんだがね。なんせ死んでるんだから（笑）。

聡子　私のお友達が一昨年亡くなったの。お嫁さんと折り合いが悪くてほとんど口もきかないくらい。御主人も先に逝ってたし、しょっちゅうこぼしてたわ。自分が死んだってきっと墓参りにも来ないわって……それがね、ちゃんとやってるみたいなの。そりゃ、どんなに憎ったらしい姑でも死んじゃってるわけでしょ。おざなりなお参りかもしれないけど、来ないよりまし。でも私と主人の場合、間違いなく誰も来ないの。友だちはいるけどお墓参りまでは。

真紀　懐かしんでほしいんですか？

聡子　え？

真紀　すみません、余計な口はさんで。

聡子　懐かしんでというより、少しくらいは覚えていてほしいの。

弘三　永遠にとはいかんが、少なくも死んでから十年や二十年はなあ。

聡子　法事ってそのためにやるんでしょ。あれってどのくらいまでやるの？

弘三　三十三回忌が限度だろ。その先もやっちゃあいけないということはないが、現実的に無理だ。仮に親が八十代で死んだとする。そのときには子供は五十代、三十三回忌をやるときには自分が八十代でとっくにお迎えがきてるよ。

聡子　孫がいるでしょ？

弘三　じいさんばあさんの法事までやらんさ。つまり、偲んでもらえるのもせいぜい二十年ということだ。

聡子　二十年って長いわよ、（真紀に）ねえ。

真紀　ええ……。

聡子　おいくつ？

弘三　女性に歳を聞いちゃいかんだろ。

聡子　いいんですよ、若い人なら。

真紀　二十七です。
聡子　じゃあ、年上なのね。一つ年上の女房は金（きん）の草鞋をはいて探せって。
弘三　金（きん）じゃない。金（かね）だ。金（かね）のわらじだ。
聡子　金（きん）じゃないんですか？
弘三　かね。
聡子　お金（かね）？
弘三　違う。金物（かなもの）のわらじ。すり切れない金物のわらじをはいてさがすつもりで。つまり、気合を入れて見つけろという意味だ。
聡子　わたし、金（きん）とばかり思ってた。この歳になるまで、いろんなところで恥をかいてたのね。
弘三　心配するな。間違ってる人は多い。
聡子　（英雄に）知ってた？
英雄　その言葉すら知りません。
弘三　大体、金（きん）のわらじなんてすぐ盗まれそうじゃないか。
聡子　違うのよ。わらじに金（きん）を使うような金持ちですからぜひお嫁に来てって宣伝の意味で。
弘三　（笑う）
真紀　金（かね）のわらじなんて足が痛そうですね。
聡子　血だらけになっちゃう。
弘三　金（きん）じゃ重くて歩けんだろ。
聡子　（真紀に）五か月くらい？
真紀　え？
聡子　赤ちゃん。
真紀　……はい。
弘三　お子さんがいるの？
真紀　わかりますか？
聡子　体形だけでなくて、肌の感じとかしぐさとかで。
弘三　そんな特技があったのか。
聡子　変でしょ。子供も産んだことないのに。私ね、妊婦さんのおなかを見るのが好きなの。見てるだけですまなくてつい聞いちゃ

うの。「今何か月ですか？」って。

真紀　教えてくれるんですか。

聡子　嫌がらないわね。大勢に聞いたけど。

弘三　統計だな、月までわかるのか。

聡子　だいたい当たるわ。

真紀　当たってます。

弘三　それ、何か役に立つのかい。

聡子　妊婦占いってのはどう？

英雄　面白そうですね。

聡子　まず妊婦さんが私の前に座るの。

聡子、真紀を自分の前に座らせる。

聡子　「あなた、五か月ですね」「そうです、よくわかりますね。すごーい！」これでつかみはオッケー（笑）。

弘三　何を占うんだ。生まれてくる赤ん坊の性別か？

聡子　そんなのエコーを見ればわかるのよ。頼めばお医者さんが教えてくれるわ。妊婦さんが聞きたいのはね、そう、生れてくる子の運命。そうよね？

真紀　……。

英雄　そんなのわかるんですか？

聡子　親を見れば想像できるわよ。

弘三　とんびが鷹を生むこともあれば逆もある。劣悪な環境でもたくましくまっすぐ育つ子もいれば、裕福な、何不足ない家に生れても心がねじ曲がることもある。

聡子　占いなんて、そんなに真剣に考えなくていいのよ。

弘三　つまり適当なことをいうのか？

聡子　ピンと来るのよ、直感。

弘三　いい加減だなあ。

聡子　女はそれで救われちゃうのよ、（真紀に）ねえ。

真紀　……。

英雄　どうなんですか？

聡子　何が？

英雄　真紀さんのは。

真紀　英ちゃん……。
聡子　では、特別無料で観てしんぜよう。
弘三　よしなさいって。
聡子　……わかりました。
弘三　早いな。
聡子　すごく元気な男の子が生れるわ。
真紀　男の子ですか。
英雄　知らなかったの？
真紀　（首をふる）
聡子　でも子供の頃に大きな災難が三回来る。
弘三　おいおい。
聡子　でも安心して、守護霊が守ってくれるから大事に至らない。
真紀　守護霊……。
英雄　どんな災難ですか？
聡子　それはわからない。
弘三　（真紀に）この人、本物の占い師でも何でもないんだから信じないで。口から出まかせなんだから。
聡子　……眼鏡が見える。
真紀　え？
聡子　この子の守護霊は眼鏡をかけてる。
真紀　眼鏡……。
聡子　眼鏡の男の人。
弘三　霊に男とか女とかあるのか？
聡子　ぶあつい眼鏡。
真紀　……。
英雄　度の強いやつ。
聡子　そう。
弘三　牛乳瓶の底ってやつだ。今どきいないだろ。そんなのかけてるやつなんて。
琴子　いますよ、今どき。

戸田琴子。牛乳瓶眼鏡である。

琴子　いますよ。
弘三　……いやあ、こりゃ失礼。
琴子　コンタクト、駄目なんです。異物を直接目につけるの気持ち悪いし、衛生的じゃないし。それに落とした時の騒ぎって。あ

れ、迷惑でみっともなくて嫌いなんです。
聡子　今は使い捨てが主流だからきれいだし、安いから昔のように必死でさがしたりしないわよ。
琴子　アドバイスありがとうございます。突然おじゃましてすみません。メモリアルパーク虹の事務所をさがしてるんですが。
聡子　事務所を？
琴子　メモリアルパーク虹です。地図がわかりにくくて。
弘三　事務所はここですが。
琴子　ここ？
聡子　ここ。
琴子　（弘三に）責任者の方？
弘三　（英雄をさして）いや、こちらが。
英雄　平野といいます（名刺を出す）。
琴子　（英雄を見て驚いた顔）……。
英雄　どうか、されました？
琴子　別に……。
聡子　わたしたちも客なの。
琴子　客？
弘三　メモリアルパークの入会希望者。
聡子　私と主人がこちらを訪ねてきた初めてなんですって。だからあなたは二番目……三番目ね。
英雄　ホームページをご覧になって。
琴子　え？　ええ。
英雄　地図、すみません……すごいところなんでびっくりされました？
琴子　いえ……。
聡子　私と主人はね、こういう雰囲気が気にいってるの。こういう素朴な感じが。ビジネスって感じじゃないところが。
琴子　……ほんとですか？
聡子　ほんとって？
琴子　ほんとに客なんですか？
弘三　サクラじゃないですよ。
琴子　ここ佐倉さんの……。
英雄　叔母をご存知なんですか？
琴子　いえ……。

聡子　何の話？

英雄　ここ、もとは僕の叔母の家なんですが、叔母の名前が佐倉といって……。

聡子　桜の木の？

英雄　字は違いますが。

弘三　佐倉宗吾郎の佐倉だろ。

聡子　そうごろう？

弘三　佐倉義民伝を知らんのか。悪税に苦しむ村民のため将軍に直訴して一家ともども磔にされた下総の名主だ。

聡子　関係あるの？

英雄　ないと思います。

琴子　……村の人に聞いたんです。

弘三　私の言ってるサクラは、客のふりをして業者とつるんでる。

聡子　ああ、あのサクラ……そう見えるのかしら。

弘三　私たち、契約したんですよ。書類とかはまだだが、この霊園に申し込むことに決めてるんです。

琴子　ほんとですか？

英雄　ほんとです。

琴子　十分納得して？

弘三　ええ。

琴子　ホームページ見ましたけど、わからない箇所がいっぱいあって。

聡子　まだ決まってないことが多いのよ、細かいところが。

琴子　それでも契約したんですか？

弘三　私どもはこの土地の雰囲気と管理人の平野さん御夫婦が気にいったんです。

琴子　細かい規定とかは関係ない。

弘三　関係ないとはいいませんが、そう重要とは考えません。

琴子　担当者を信用するだけで……。

聡子　生命保険の契約書、あるでしょ。小さな字でやたら厚くて、あれ全部読む？　そのくせあれだけぐだぐだ書いてあっても、支払いの時には何だかんだ難癖つけてくる。誠意なんて、これっぽっちもない。

弘三　だったら、人を見て判断する方が余程安心できる。

聡子　あなたも現地まできたのは興味があったからでしょ。心に感じるものがあったからでしょ、違う？

弘三　冷やかしでわざわざこんな田舎までこないよねえ。

琴子　田舎だから来たんです。私、有給休暇を消化しなきゃならなくて。どうせなら空気のいいところへって。普段、霞が関のオフィスにいるんで。

弘三　霞が関って、もしかしてお役人？

琴子　一応、厚労省です。

聡子　へえ。

琴子　半分調査もかねて。

英雄　何か問題あるんですか？

琴子　問題があるかは、詳しくお話をうかがわないとわかりませんが。

弘三　厚労省のお役人が出張ってくるほどのあれとは思わんが。

琴子　それはこちらで判断することです。

弘三　（ムッとして）そうですか。

真紀、お茶を持ってくる。

聡子　奥さん、お茶なんていいのよ。お客さんじゃないの、調査の人。

真紀　警察の？

弘三　厚労省のお役人だそうだ。

琴子　客じゃないなんて言いました？　なるかもしれないじゃないですか。

聡子　調査なんでしょ。

琴子　半分は個人的な……。

聡子　どっちなの？

琴子　問題があればそれなりに……。

弘三　お役人だねえ……平野さん、いいからひきとってもらいなさい。

琴子　帰れっていうんですか？

弘三　（英雄に）こういう人は仮に入ってもあとからクレームをつけるだけ。

聡子　申し込むつもりなんてないんでしょ。

琴子　それはよく説明を聞いてから。

聡子　無理しないでもいいわ。

琴子　あります。あるから来たんです。こんなところまで。

弘三　なら調査だなんて役人風をふかすことないじゃないか。

琴子　私はそんな……。

英雄　あの、何か気のついたことがあったらおっしゃってください。僕、こんな事業立ち上げましたが、正直ずぶの素人で、経験もないし、思いつきで突っ走ったわけで、山口さんにもいろいろアドバイスいただいてます。みなさんの意見を聞きながら満足のいくものに。

琴子　客でもないのになんて言われたら。

英雄　言いませんよ。

琴子　帰れって。

英雄　言いませんから。

琴子　……まず、入会資格ですが。

弘三　そんなのあるの？

英雄　特別には……。

聡子　入会金さえちゃんと払えばいいんじゃないの？

英雄　ええ、まあ。

琴子　それっておかしくないですか。だって、これっていわば共同のお墓でしょ。

英雄　お墓というのはちょっと……お骨は納めませんので。

琴子　お骨を納めなくても、終の住みかという意味ではお墓と同じでしょ。霊園なんだから。つまり、私たちは同じお墓に入るわけですよね。同居するわけですよね。それが、その、変な人と一緒では嫌じゃありません？　そりゃ気にいらない人もいるかもしれない。でも線引きは必要じゃないですか？　価値観とか道徳観とか、あまりにもかけ離れた人が一緒だなんて困ります。だから、何らかの入会資格、入会の条件がなければおかしいのでは。

聡子　私の友だちにもいたわ。お義母さんと一緒のお墓なんて御免だって。

琴子　わかってくださるでしょ。

聡子　亭主と一緒も嫌という人も（笑）。

弘三　じゃあ、どうしようっていうんだい？

琴子　ですから基準を設けて。

弘三　大卒以上に限るとか、年収がいくらかとか、身内に犯罪者がいないとか、そういうのかい？　結婚の相手をさがそうっていうんじゃないんだから。

琴子　……独身です。

弘三　え？

琴子　独身です、私。

聡子　まあ、そうよね。つれあいがいるのに、一人でこういうところへ来ないわ。

琴子　お二人は？

聡子　私たち、子供がいないから。

弘三　あなた、御家族は？

琴子　母親がいますが……。

聡子　御兄弟はいらっしゃらない。

琴子　ええ……。

聡子　御親戚はいるでしょ。

弘三　あなたのようなお偉いキャリアには近づきがたいと。

琴子　キャリアじゃないです。ただの職員です。

聡子　キャリアって？

弘三　上級公務員試験を通ったエリート官僚のこと。

聡子　でもすごいわよ、厚労省なんだから。

弘三　（英雄に）もし入会資格が必要というなら、お参りをしてくれるような身寄りのない人ってことになりますかね？

英雄　そうですね。

聡子　資格なんていわなくても自然とそうなるわよ。平野さんもそういう人たちのためにここを考えたんじゃないの？

英雄　何となくですが。

琴子　それともう一つ。私は何を納めたらいいんでしょう。お骨じゃないとしたら。

英雄　それもまだ細かく決めてないんです。散骨は問題があるようで、さっきもこの村の坊さんがクレームをつけてきました。法律もうるさいようで。

琴子　埋墓法ですね。

英雄　一応、このくらいの大きさの容器に入るものをお預かりして埋めようかと。

琴子　容器ですか？

英雄　まだ用意してませんが。

弘三　（聡子に）おい、何を入れる？

聡子　そんなにたくさん入りませんよね。

弘三　老眼鏡と入れ歯は欠かせんな。

弘三と聡子、笑う。

弘三　写真とか日記か。

聡子　手紙は？

弘三　手紙？

聡子　昔の女の人からの。

弘三　何言ってるんだ（笑）。そうだ、おまえは指輪とか帯どめとか。

英雄　貴重品はどうでしょう。悪いこと考えない人もいないとは限らない。

弘三　副葬品泥棒か。エジプトのファラオの墓みたいだな。

聡子　たいしたものないわ。こんなもの後生大事にって、泥棒さんに笑われちゃう。

琴子　日記をいれたとします。

聡子　日記、書いてるの？

琴子　誰かが読むことがあるんですか？

聡子　読んでほしいの？

琴子　そんなの恥ずかしいです。

聡子　じゃあよせば。

琴子　でも誰かに読まれなければ日記って意味ないじゃないですか。

弘三　ありゃ自己満足のものだから。

聡子　日記なんてダメ。私、家計簿もつけないもの。

琴子　私も書いてません。

弘三　なんだ。

琴子　聞きたいのは、その容器の中に入れたものを誰かが見ることがあるかってことです。それを見たり読んだりして……私のことを思い出すことがあるかってこと。

聡子　思い出してほしいの？

琴子　そういうことでは。

弘三　よくわからん人だな（笑）。やっぱりやめた方がいいよ、あなたは。

聡子　五十万も出すんだったら海外旅行でもしなさいよ、若いんだから。

琴子　海外なんてもう何度もいきました。

弘三　おやおや。

琴子　飛行機に乗ると必ず祈るんです。墜ちますようにって。

聡子　墜ちることを祈るの！

琴子　大勢一緒だからこわくないし。心残りのことなんて何もないし。旅行に出るときは何もかも整理して、迷惑がかからないようにしています。

聡子　几帳面なのね。

琴子　それに飛行機事故だったら新聞やテレビに名前が載るでしょ。昔の同級生なんかに、「あ、あいつだ」なんて。

真紀　思い出してほしいんですか？

英雄　真紀さん。

琴子　私ね、薄いの。消えそうなくらい。職場にいても誰も気にもとめない。休んでも誰も気づかない。

弘三　まさか。

琴子　三日間無断欠勤したことあるんです。すごい熱で、病院へ行くどころか起きあがることもできない。電話もかけられないくらい弱っていたんです。このまま死ぬかと思った。それでも四日目にはふらふらになりながら出勤したんです。怒られると思ってた。上司に謝りにいったら、「あ、そうだった？　気がつかなかった」って。

弘三　そりゃひどいな。

琴子　私の担当なんてどうでもいいような仕事ですから、誰も困りません。

聡子　職場の仲間は？

琴子　役所に入った頃は友だちがいました。でもみんな結婚してやめて、残ったのは私だけ。同僚は歳の離れた後輩ばかり。

聡子　お局様か。

琴子　うとまれるぐらいならいいです。嫌われも憎まれもしない。空気と同じ。

弘三　いいじゃないか。気楽でいい。給料はちゃんともらえるんだし。

聡子　で、何を入れるの？　写真？

琴子　写真なんてあまりないです。

聡子　いまどきの人はよく撮るでしょ。ほらプリ……。

英雄　プリクラですか。

弘三　携帯でも撮れるし。

琴子　写真は好きじゃないです。一人じゃ上手に撮れないし。

聡子　私もね、ほんとのことというと写真はあまり好きじゃ……。

橋本透、カメラをもって登場。いきなり琴子を撮る。

琴子　や、やめてっ！

弘三　何だ、君は？

聡子　勝手に撮っちゃダメでしょ。嫌がってるでしょ。

今度は聡子を撮る。

弘三　おい、聞こえないのか！

弘三を撮る。

弘三　よさんか！

英雄　ちょっと、あなた、誰？

英雄を撮る。真紀に気づき、近づく。

弘三　こらっ、貴様！

橋本、真紀に近づきカメラを向ける。
真紀、持っていたお盆で橋本を殴打。

橋本　いたっ！
真紀　ごめんなさい。
聡子　謝らなくていいわよ。
橋本　殴らなくても……。
英雄　あんた、何ですか！
弘三　不法侵入だ。それと肖像権の侵害だ。
聡子　しょうぞうけんって？
弘三　本人の許しを得ず写真を撮っちゃいかんのだ。
聡子　そんなのがあるんですね。
弘三　外国で現地の人を勝手に撮ると、えらいめにあうんだぞ。
聡子　魂が取られるとか？
弘三　そんなとこだ。金を要求されるくらいならいい。暴力沙汰になることもある。
橋本　病気なんです。
弘三　はあ？
橋本　これ、病気です。
英雄　病気？
橋本　シャッターチャンス症候群。
弘三　何だと？
橋本　シャッターチャンスを逃すことを極度に恐れる強迫神経症の一種。
聡子　とってつけたような病名ね。
弘三　いい加減なこというな。
橋本　ほんとです。いったん撮りたくなるとシャッターを押すのを止めることができないんです。
弘三　じゃあカメラを持たなきゃいい。
橋本　カメラを持たないと不安でパニックを起こすんです。だからいつも手元に置いています。トイレでもお風呂でも。
弘三　濡れるだろ。
橋本　完全防水です。
聡子　寝る時も？
橋本　枕元に。

弘三　夢でも撮るのかね？
橋本　いいですね、それ。
聡子　いつもこんなふうに揉めてるの？
橋本　病気ですから。
弘三　居直っていいもんじゃないぞ。
英雄　……あの、ご用は？
橋本　え？
英雄　ここへ何しに？
橋本　あ、僕、霊園に用があって。メモリアルパーク、虹ってところに。でもこの地図、わかりにくくて。
英雄　すみません。
弘三　ここだよ。
橋本　ここ？
聡子　ここが霊園の事務所なの。
橋本　ここが……（シャッターを切る）すみません。
英雄　いいですよ、人じゃなきゃ。
橋本　築何年？
英雄　百年は越えているかな。
橋本　事務所ってことはみなさん、霊園のスタッフ？
弘三　私と家内、それとこちらが（琴子をさし）客で、この人が管理人の平野さん。
橋本　平野さん。
聡子　（真紀をさし）奥さん。
橋本　……奥さん？
真紀　……。
橋本　こちらの？
聡子　そう。
橋本　そうですか……。
聡子　人妻に興味あるの？
橋本　そんなんじゃないです。
聡子　冗談よ。
橋本　僕も一応客なんですが。
弘三　若いのにもう死んだときの用意か。それも強迫神経症？
聡子　おいくつ？
橋本　二十歳です。
英雄　学生？

橋本　やめました。
弘三　ニートってやつだな。
聡子　何ですか、それ？
弘三　学校にも行かず働きもせず、ぶらぶらしてるやつのことだ。
橋本　橋本です。
英雄　え？
橋本　名前です。橋本透。
英雄　橋本さん。
橋本　透は透明の……。
英雄　平野です（名刺を出す）。
真紀　英ちゃん……（琴子を見ながら）あの方の名前、まだうかがってない。
英雄　すみません。
琴子　いいんです。そういうの慣れてますから。戸田です。戸田琴子。
聡子　コトコ、めずらしい名前ね。
琴子　琴子の琴は楽器の琴です。
聡子　お琴の琴ね。
琴子　三十三です。
弘三　若くみえる。せいぜい二十代後半。
聡子　あなた。
琴子　年相応の落ち着きがないんです。
橋本　お金あります。ミニロトで百万あてたんです。足りませんか？
弘三　五十万でいいそうだ。（英雄に）そうだよね？
英雄　ええ。
橋本　持ってますんで（リュックサックから出そうとする）。
英雄　ちょっと待って。
橋本　ニートは駄目ですか？
英雄　そうじゃなくて、山口さんもおっしゃったけど、そんなに若いのに。
橋本　年齢制限があるんですか？
英雄　ないけど。ここは、その、お墓とはちょっと違うけど、まあ、似たようなものじゃないですか。山口さん御夫婦はお歳だから準備というか、考えておくべきだと思うんです。でも橋本さん、二十歳でしょ。ま

だずっと先の話だ。ましてニートで収入ないならお金、大事にしなきゃ。

聡子　百万なんてすぐなくなっちゃうわよ。

橋本　若いっていうけど、いつ死ぬかなんてわからないでしょ。交通事故にあうかもしれない。通り魔にあうかもしれない。ホームから突き落とされたり、クレーンが倒れてくるかも。隣の部屋の硫化水素自殺に巻き込まれるかもしれない。ビルから飛び降りた人とぶつかるかも。気づいてないだけで、悪性の腫瘍ができてるかも。

真紀　……。

橋本　何万人に一人の難病になるとか。

弘三　そんなの、宝くじにあたるような。

聡子　あたったのよね。

橋本　幸運があるってことは悪い運もやってくるってことで。

聡子　でも二十歳なんだから、そのお金で海外旅行にでも行って見聞を広めてきなさいよ。（琴子に）ねえ。

琴子　……。

聡子　この人、海外旅行通だから。

橋本　飛行機が墜ちるかも。

琴子　墜ちないわよ。

橋本　墜ちませんか？

琴子　なかなか墜ちない。

聡子　この人、飛行機通だから。

弘三　私が君だったら、全部遊びに使ってしまっただろうな。間違っても霊園に申し込もうとは思わん。

橋本　僕、絶対に長生きできませんから。

弘三　私だってこの歳まで生きるとは思わなかった。同窓会には十人集まらん。体や（頭をさし）こっちが不自由になって来れんのもいるが、まあ、私の歳だと戦争が半分。

聡子　胸も多かった。

琴子　結核ですか？

聡子　私、今でも覚えてるわ。女学校の先輩で綺麗な人がいたの。いいとこのお嬢さんで上品で頭がよくて、それですごくやさし

いの。憧れてた。でも結核であっけなく。あんな非の打ちどころのない人がどうして死ななきゃならないんだろうって。

琴子　私みたいなブスは長生きするんです。

聡子　あなた、ブスじゃないわよ。

琴子　ブスです。それも暗いブスです。ブスはせめて明るくあるべきなのに……暗いブスは最悪。ならみんなにいじめられてストレスのはけ口になればいいのに。

橋本　無視されるんですか。

琴子　適当な距離を保ちつつ、それ以上近づいてはくれない。

橋本　わかります、そういうの（シャッターを切る）。

弘三　おいっ。

琴子　私でよかったら撮ってください。そのかわり写真いただけます？

橋本　は、はい。

琴子　お金払いますから。

弘三　年寄りがいらんことをいうかもしれんが、橋本君も。こちらのえーと。

聡子　戸田琴子さん。

弘三　二人とも霊園なんかに（英雄に）失礼……霊園に興味を持つより他にやることがあるんじゃないかな。確かに人間、いつコロッといくかもしれんが、死ぬことばかり考えても。

真紀　メメント、モリ。

琴子　死を想え。ヨーロッパ中世の格言。

聡子　しおもえ？

琴子　死を想え。

聡子　死を想うの？

琴子　死を忘れるな。死を常に意識していろ。当時、黒死病、ペストが蔓延していました。昨日まで元気だった人が突然死んでしまう。家族も友人も金持ちも貧乏人も、王様も聖職者も分け隔てなくバタバタと死んでいく。防ぐすべがなかった時代の言葉。

弘三　ペストじゃなくても戦中、戦後はまさに死を想えだった。

英雄　（真紀に）真紀さん、難しい言葉、知ってるんだね。それって……。

橋本　まき、さん……。

聡子　（橋本に）あなた、家族、いないの？

橋本　え？

聡子　家族よ、いないの？

橋本　あ、姉がいます。

聡子　それなら心配することないじゃない。あなたが若くして逝ったとしても、姉さんがちゃんとしてくれるでしょ。

橋本　僕、中学生の頃からいつも死んだらどうなるんだろうって考えていました。考え出すと夜も眠れなくなって。みんなには馬鹿にされたし、気持ち悪いって。でも僕にいわせれば、死んだらどうなるか考えないやつの方がおかしい。

英雄　考えてもしかたないと思わなかった？

橋本　怖かったんです。安心したかった。大丈夫だよ。心配することないよっていってほしかった……いろんな宗教にも誘われたけど。どこも安心できなかった。変な物ばかり売りつけられ、お金とられて。

英雄　ここには、どうして？

橋本　ネットでたまたま目について。僕が求めていたものがあるんじゃないかって。

弘三　えらく気にいったんだな。

橋本　わかるんです。騙されてばかりだったから。テクニックっていうんですか、それがこの霊園のホームページには全然ない。お金儲けのセンスがないというか、素人くさいというか。

弘三　あたってる（笑）。

橋本　人を騙すようなところじゃない。

英雄　ほめられてる気がしないな。

橋本　それからあのモニュメントのデッサンです。丘の上に見えたあれ。そうですよね？　芸術的とは思わないけれど、すごくひかれたんです。

聡子　平野さんがつくってるのよ。

英雄　みんな、茸だって。

橋本　未完成なんですか？

弘三　製作費につまっちゃって。

橋本　だったらこれ、使ってください。（金を出す）それと僕、暇なんで手伝わせてくれませんか？　これでも器用な方なんです。プラモデルなんてよくつくったし。

英雄　うーん。

橋本　バイト代なんていいです。

弘三　平野さん。この人は入れてもいいみたいだな。

聡子　あなたも言うことがコロコロ。

琴子　あの……。

英雄　すみません、あなたもお客さんなのにほっといて。

琴子　私にだってお金あります。冷やかしじゃないですから。

英雄　そんなこと言ってませんよ。

琴子　一応二番目ですよね。このご夫婦が一番だから。

聡子　主人が一番で私が二番、あなたは三番。

琴子　三番ですか。

聡子　それでこの人が四番。

橋本　僕、何番でもいいですよ。

琴子　定員はあるんですか？

英雄　容器が納まるだけということになるんでしょうが、あそこ、結構広いですから。

聡子　私たち、第一期のメンバーってことでしょ。古株ってことじゃない。少しは大きい顔してもいいわよね（笑）。

弘三　古株……牢名主かい？

聡子　ほかにいい喩はないの。

弘三　同期の桜。

聡子　また桜（笑）。

橋本　モーニング娘でもＡＫＢでも一期生っていうのは威張ってますもんね。

聡子　何、それ？

橋本　若い子の宝塚みたいな。

琴子　仲間ってことですか？

聡子　何かの縁でしょ、これも。そういうの鬱陶しい？

琴子　お互い何も知らないし。

聡子　私、結構あなたのことがわかったけど（笑）。詳しく知らなくてもいいじゃない。楽でしょ、おつきあいするうえで。

弘三　おつきあいか。

聡子　これからいろんな人が入会するのよ。なかにはきっと我儘な人や意地悪な人もいるわ。でもそういう人をチェックするのも難しいわけだし。

弘三　おいおい、もうみんな死んでるんだ。そのときには。

琴子　この村の人は？

英雄　自宅のそばにお墓がありますから。

琴子　反対とかされませんでした？

英雄　ありました。

聡子　あったの？

英雄　お寺さんに。

弘三　商売敵ってことか。

英雄　うさんくさいと思われているようです。

聡子　まあ、ある日突然、丘の上に茸が出現すれば驚くかもね。

英雄　説明したんですが、わかってもらえたかどうか。村に住むのならまわりとうまくやってくれって。

弘三　賑やかになるのに。

聡子　どうしてここだったの？

英雄　え？

聡子　どうしてこの村だったのかなって。

英雄　あそこは叔母の土地なんです。それを僕が相続したんで。叔母は少々変り者で村の人たちともあまり。

聡子　村はずれだしね。

橋本　僕、ひとつ気になることが。

英雄　何です。

橋本　途中、村の人に道を聞いたんです。そしたら、「首塚の方へ行くのか」って。

聡子　くびづか？

琴子　首塚ですか。

聡子　何、それ？

弘三　首が埋葬されているところだ。

聡子　首って、これ？

弘三　戦いに敗れた武将の首なんかが埋められて。

橋本（英雄に）そういうところがこの近くにあるんですか？

英雄　僕、ここの生れじゃないからあんまり詳しくは……。

聡子　こわいわね。

真紀　英ちゃん、あれじゃない？

英雄　あれ？

真紀　大きな石。モニュメントの向かいにあるやつ……畳二畳くらいの平らな石が二段に重なって、お供えのお餅みたいな。

英雄　あれか……。

真紀　自然に置かれたものじゃないって思ってたけど。知らなかったの？

英雄　首塚だなんて。

弘三　霊園の敷地にあるの？

橋本　首塚って、お墓なんですか？

琴子　お墓よ。

弘三　村の連中の先祖ってことはないだろ。

聡子　そうなんですか？

弘三　尋常な死に方をしたわけじゃない。戦い敗れて、無念の死を遂げたわけだ。その怨霊を鎮めるために葬ったわけだから。

聡子　そんなすごいものなの。

弘三　だとしても何百年も前の話だ。

琴子　落武者狩り。

聡子　何、それ？

琴子　戦いに敗れ、城から落ちのびていく途中でここで殺されたんです。

弘三　おいおい。

琴子　村人によって。

橋本　えーっ。

琴子　賞金ほしさに手負いの侍たちを。領主の家族もいたかもしれません。お姫様や幼子も。村人は介抱を装い一行を油断させ、毒を盛り、そして……。

弘三　時代小説だよ、それ。

琴子　ところがその祟りで。

聡子　ほんと？

弘三　信じるなよ。

琴子　村人関与説はともかく、ここで惨劇があったことは間違いないです。だって首塚なんですから。

真紀　村の人たち、それで反対してるんじゃ……。

聡子　おそらく何百年も守ってきたんでしょ。

弘三　墓守か……。

橋本　ここにもいるんでしょうか？

聡子　ここにもって？

橋本　ですからこの霊園にも。メモリアルパーク虹にも。

聡子　何が？

橋本　墓守です。

聡子　お墓ってわけじゃないのよ。

橋本　ここをずっと管理するというか、見守ってくれる人です。その役目をはたしてくれるのはこちらの平野さんだけですよね。

聡子　奥さんもいるわ、それに……。

弘三　確かにそういうアフターケアというか、管理の仕組みも必要だな。

橋本　僕が入会したとします。そして手続きが済んだ途端死んでしまったとします。

弘三　忙しいな。

橋本　それはいいんです。落ち着き場所が確保されてるんですから。でももしも、その後すぐに平野さんがお亡くなりになったとします。

弘三　縁起の悪いこと言うなよ。

橋本　もしもです。その場合、奥さんがいらっしゃるでしょうが、その奥さんも。

弘三　まだ若いんだよ、二十代だ。

橋本　でも絶対はないですよね。

弘三　この霊園をずっと管理していくための仕組みは大事だとはいったが、こういうものに永遠はなかろう。

聡子　首塚を守る村人のような人がいればいいってことでしょ。

琴子　何百年も守ってきた首塚も過疎化がす

すめばやがてただの石くれになるんです。

弘三　私はこの霊園が何百年も存在し続けることまで期待してないよ。いつか自然の一部になればいいんだ。

聡子　そうね、そうよね。

弘三　そりゃ絶対はないさ。だが私らはともかく、君らはまだ生きなきゃならん（笑）。

琴子　私、厄年です。

聡子　そうね。

琴子　高校の同級生が今年死にました。癌です。年賀状が来てたのに。

聡子　若い人の癌は早いのよ。

琴子　彼女は結婚して子供が二人いました。まだ小さいのに気の毒だって思いました。でも……でも、うらやましいと思う気持ちもあったんです。

聡子　うらやましいの？

琴子　彼女、御主人と二人の子どもの心の中でずっと生き続けるんです。それもきれいな妻、やさしいお母さんのまま、褪せることなく。お墓参りとか、そんなものじゃない。いつもいつも、ずっとずっと偲んでもらえる。うらやましい。私、どうですか？今死んだら、誰の心の中にも存在しないんです。だから早く死んだ彼女が……。

真紀　そんなことない。

英雄　真紀さん。

真紀　子供を残して死ぬことがどんなに悔しかったか。どんなに悲しかったか。子供たちがこれからの人生でどんなに辛いことがあっても、母親として慰めてやることも、励ましてやることも、抱きしめてやることもできない。そう思ったら、そんなこと耐えられない……。

聡子（小声で）彼女、もうじき母親になるの。

琴子　……。

聡子（小声で）子供のいない私にはあなたの気持ちもわかるけど。

英雄　思い出した……。

弘三　なんだい？

英雄　あの岩の上に上っていたら、叔母が血相かえて走ってきて。

弘三　何か言わなかったのか、その時？

英雄　いえ、どうしてそんなに怒るのかわからなくて……。

暗転。

3

半月後の正午頃。叔母の家。縁側。宮坂、並べられた壺をながめている。

宮坂　素人の手にしては……。

真紀　上手ですよね。

宮坂　一つひとつ、形が違うんですな。

真紀　違うんですが、どれも子宮を表してるんですって。

宮坂　地球をですか？

真紀　ちきゅうじゃなくて、しきゅうです。し、きゅう。子どものお宮って書いて、女の人の……。

宮坂　あ、ああ。子宮。赤ちゃんのいる、あそこ。あそこは、こういう感じなんですか？　わし、見たことないんで。

真紀　私も……ないです。

宮坂　普通、ないよね。

真紀　実際の形というより、イメージじゃないですか。

宮坂　イメージね……。

真紀　琴子さんの作です。

宮坂　コトコ、さん？

真紀　戸田琴子さん。メモリアルパークの入会者です。会員番号3。厚労省のお役人で。

宮坂　じゃあ、ここは国のお墨付きか（笑）。

真紀　琴子さん、十年もやってらっしゃるんですって、陶芸。土をこねてると、心が落ち着くんだそうです。それで、ここの壺をつくらせてくれないかって。

宮坂　これに、いろいろ入れる？

真紀　写真とか日記とか、その人が残したいものを入れるんです。何でもいいんです。大きさに限りがありますけど。

宮坂　それをあそこに埋めるというわけだ。

真紀　その上に目印の木の苗を。

宮坂　なるほど……。

真紀　（壺を指さしながら）こっちが会員番号１の山口弘三さん、隣が会員番号２の山口聡子さん、御夫婦ですからお揃いに。これは会員番号４の橋本くんの。彼、まだ二十歳なんですよ。

宮坂　二十歳が入会したの！

真紀　手伝ってくれてるんです。モニュメントづくりなんかも。ずっとここに泊り込んで。今も英ちゃんと一緒に。

宮坂　あの、茸を？

真紀　すごく器用なんです。

宮坂　大勢いるんですか、会員さん？

真紀　まだ四人ですが、みなさんいろいろ協力してくれて。最初のメンバーだから、何だか意気投合して。

宮坂　ふーん。

真紀　御住職のおっしゃったように、ここ、まだ不備なとこがありますから。英ちゃん、そういうのつめるの得意じゃないんで。

宮坂　わしもいろいろ言ったがね。まあ、こういうのもあるかなって……あなたも平野さんも正直な人だ。決して人をだましたり、おとしいれたりするような人じゃない。それはわかるんだ。それはよくわかる。これでも坊主だから、人を見る目はね。

真紀　（笑う）

宮坂　おかしなこと言った？

真紀　御住職と同じこと言った方がいたんで。

宮坂　ただ要領が悪いというか、まあそれが若いってことなんだろうが。

真紀　すみません。御迷惑かけて。

宮坂　……で、つかぬことを聞くが。

真紀　はい。

宮坂　平野さん、御両親は？
真紀　英ちゃんのですか？
宮坂　御存命？
真紀　お母さんは五年前に亡くなられて。
宮坂　佐倉さんのお姉さんだよね。
真紀　ええ。
宮坂　……お父さんは？
琴子　お父さんはそれより前に。
宮坂　亡くなられた。
真紀　確かそう言ってましたが。
宮坂　確かそう言ってた？
真紀　はい。
宮坂　……で、御兄弟は？
真紀　一人っ子です。
宮坂　平野さん、こちらへは、この村へはよく来られてたのかな。
真紀　小さい頃に二度ばかりって。
宮坂　二十六だったよね。
真紀　それが何か？
宮坂　いや、別にどうということじゃないんだが……で奥さん、この前はえらく疲れた顔してたが、明るくなったね。
真紀　そうですか。
宮坂　大野さんとこのばあちゃんが心配しとった。あの妊婦さん、大丈夫かねって。
真紀　……。
宮坂　（壺をいじりながら）お子さん、いるんでしょ？
真紀　……ええ。
宮坂　ばあちゃん、産婆だから。
真紀　じゃあ、ご挨拶に行ったときに……。
宮坂　この村の六十歳以下はほとんどあのばあちゃんがとりあげた。八十を過ぎてるが現役だ。いざというとき頼りになるよ。
真紀　お見通しだったんですね。
宮坂　産科の病院、隣町だし。
真紀　車もないですし……。
宮坂　車、乗ってきたんじゃ……。
真紀　あれ、レンタカーです。
宮坂　そうそう、ばあちゃんがこの間、よそ

者にここのことを聞かれたんだって。

真紀　ここのことを？

宮坂　半年くらい前にも同じ連中を見かけたそうだ。

真紀　どんな人たちなんですか？

宮坂　どんなって、結構年寄りの……。

山口夫婦が連れ立ってくる。

聡子　（真紀に）こんにちは。また来ました。

弘三　お邪魔しますよ。

真紀　どうぞ御遠慮なく。ここはみなさんの場所なんですから。（宮坂に）会員さんです。会員番号1と2の山口さん御夫婦。（二人に）こちら、この村の御住職さんです。

弘三　ああ、こりゃどうも。

聡子　霊園に反対されているとか。

弘三　そうなんですか？

宮坂　いや、散骨のことがあったんで。そういうんじゃなければ問題ないんで……まあ、こういう田舎ですからいろいろと。

弘三　よそ者のやることは何かと気になりますよね。

聡子　私たちはよそ者だけど、平野さんは叔母さんがこの村の方なんだから、よそ者って言ってしまうのは。

弘三　平野さん、つきあい下手だから。

宮坂　わし、村会議員もやってますが、村が活性化するのは大歓迎なんです……でも前に一度懲りてるから。

弘三　リゾートでしょ。

宮坂　わかりますか。

弘三　たいがいそれですよ。

宮坂　ひどいめにあいました。何だか知らんが、東京のコンサルタントとかいう連中がリゾートの計画を持ってきましてね。

弘三　あの時代にはよくあった。

宮坂　夢のような計画を見せられたが、結局何もできず、村も散々食いものにされました。あのときの嫌な思いがあるんでしょう

な。あの茸を見たときに……。

弘三　モニュメント。

宮坂　リゾートを連想したんです。こりゃあやしいって。

弘三　日本中そうだったんですよ。

宮坂　日本で一番美しい星空の村。そんな謳い文句でしたが、星空なんぞで観光客は呼べません。

弘三　そんなにきれいなんですか。

宮坂　都会に比べれば、そりゃね。

聡子　田舎は明りが少ないから。

宮坂　リゾートなんて、ありゃ詐欺です。それも国が片棒担いだ詐欺です。

弘三　御住職は、こちらのお生まれですよね。

宮坂　先祖代々の坊主稼業ですが。

弘三　じゃあこの村のことは何でも御存じだ。

宮坂　まあ、だいたいのことは。

弘三　首塚、なんですが。

宮坂　首塚？　ああ、首塚。そういえばみなさんの霊園のすぐそばだ。

弘三　あれはどういった由来の？

宮坂　誰のものなのか、なぜここに埋められたかには諸説あるんですが。

聡子　城から領主と家族が逃げて、ここで村人に襲われた。

宮坂　時代小説にありますな。懸賞金欲しさに村人が毒を盛って殺した、ですか？　それはない（笑）。

聡子　諸説あるんでしょ。

宮坂　武士じゃなさそうですよ。ここらで一揆があったときの首謀者だったとか。

弘三　それで処刑されたか。

聡子　じゃあ、佐倉さんと一緒ね。

宮坂　佐倉さん？

弘三　義民、佐倉宗五郎。

宮坂　ああ、歌舞伎の。

聡子　歌舞伎になったの？

宮坂　『東山桜荘子』、子別れの場面とかありましたね。

聡子　あれ、村でおまつりしてるの？

宮坂　しませんよ。近所の人がたまにお供えするくらい。

聡子　祟ったりしない？

宮坂　そんな話、聞いたことないですね。お地蔵さんみたいなもんだ。

弘三　佐倉宗吾は祟ったそうだが。

聡子　首塚というくらいだから首があるの？

宮坂　埋めたというのもほんとかどうか。

聡子　がっかりね。

真紀　よかったです。怖いものじゃなくて。

宮坂　でも不思議でしょ。

聡子　何が？

宮坂　あの岩です。結構な大きさだ。あんなものをどこから運んできたのか。ここらの山からじゃない。ありゃ玄武岩だ。かなり遠くから運んできたと思うんですが、どうしてこんな田舎まで。それも権力にたてついて殺された者のために。

弘三　なるほど。

真紀　わからないんですか？

宮坂　わかりません。

弘三　橇に乗せて馬で引いたか。

宮坂　大事業ですよ。

聡子　やっぱり祟るんじゃないの？

真紀　やめましょうよ。

宮坂　心配ですか？

真紀　山口さんの奥さん、霊感がおありなんです。守護霊も見えるそうで。

宮坂　守護霊？

真紀　私のおなかが五か月だってこともぴたりあてたし。

宮坂　ほお、そりゃ……。

真紀　牛乳瓶の守護霊も。

宮坂　牛乳瓶？

真紀　眼鏡です。牛乳瓶の底みたいな。

宮坂　何だかよくわからんが（笑）。

弘三　確かに、丘の上まであの岩を運ぶのはたいへんだな。

真紀　橋本くん、靴のままで上ってます。

聡子　罰があたるわね。

真紀　何か見えるんですか、霊が？
聡子　今度じっくり見てみるわ（笑）。
宮坂　……あの、お二人は前にもここへいらしたことが？
弘三　前といいますと？
宮坂　半年ぐらい前。
弘三　いや、先月来たのが初めて。今日が二度目。
宮坂　そうですか（不審な顔つき）……。
聡子　平野さん、作業中？
真紀　朝からずっと。橋本くんと二人で。
聡子　いい助手ができたわね。
宮坂　……不思議といえば、十年くらい前のことですが。
弘三　十年前？
聡子　何かあったの？
宮坂　……動いたんです。
弘三　何が？
宮坂　首塚の岩が。
真紀　あの大きな岩が？
宮坂　十年前まではもっと丘の端の方にあったんです。それが東側に約三メートルほど移動しました。
弘三　三メートルも。
宮坂　簡単に動かせる代物じゃない。何トンもある。重機でもあれば可能でしょうが、あの丘まで重機をあげることはできませんし。
弘三　大勢でやれば人力でも。
宮坂　その場合、かなりの人数を動員しなければ。十人や二十人じゃ動かない。もちろんそんな騒ぎはなかったわけで、誰も知らぬ間に動いてた。
真紀　地すべりとか……。
宮坂　それなら気がつくし、他のものも動くでしょ。ところがあの岩だけ。
弘三　仮に誰かの仕業として……。
聡子　天狗？
弘三　なぜそんなことをするのかな。
宮坂　まあ、実害があるでなし……いや、佐

倉さんだけは迷惑でしたかな。

弘三　迷惑とは？

宮坂　岩が動いた先が、佐倉さんの地所だったから。

真紀　あそこ……。

宮坂　といって、元の場所に戻すのもたいへんだからずっとそのまま。

弘三　平野さんの叔母さんは文句を言わなかったんですか？

宮坂　文句の持って行き先がない。

聡子　実は叔母さんが動かした。

宮坂　まさか。でも案外気に入っていたのかも（笑）。まあ、誰のものということもないし……気になりますか？

弘三　いや、別に……。

宮坂　（真紀に）では奥さん、私はこれで。

真紀　英ちゃん、呼んできます。

宮坂　いいですよ、仕事中でしょ。寄り合いの件、よろしく。

真紀　いろいろすみません。

宮坂、退場。

聡子　何の用だったの？

真紀　来週、村の寄り合いがあるらしくて。

弘三　顔を出せっていうのか。

真紀　やっぱり村の人たちとも。

弘三　吊しあげくうことはないだろうが。

真紀　大丈夫ですよ。（野菜を見せて）これ、持ってきてくださって。

聡子　上手につきあえばいいのよ。

弘三　田舎の人間は純朴そうにみえて結構ずるいところがあるからな。

聡子　それは生きる知恵。

弘三　そういうもんかね。

聡子　（真紀に）あなたも行くの？

真紀　英ちゃんだけです。女の人は女の人だけの集まりがあるみたいで。

聡子　そっちの方がたいへんそう。

弘三　品定めされるわけだ。

真紀　子供のことも知られてるみたいだし。

聡子　あらまあ。

真紀　この坂の下のおうちの方、産婆さんなんですって。私、お願いしようかと。

弘三　大丈夫かい。そんな年寄りに頼んで。

真紀　御存じなんですか？

弘三　いや、どうして？

真紀　お年寄りだって。

弘三　（少々狼狽）産婆なんて、たいがい年寄りじゃないのかい？

聡子　若い産婆さんだっているでしょ。今は助産婦さんっていうんだっけ。

英雄、橋本と一緒に戻ってくる。

真紀　おつかれ。

英雄　（山口夫婦に気づいて）ああ、どうも。

聡子　おつかれさん。

橋本　こんちわ。

弘三　やってるね。

英雄　橋本くん、器用なんで助かってます。ただ凝り性で、やることが丁寧すぎて。

橋本　平野さんが雑なんです。僕はオタクが入ってるから、ああいう作業は完ぺきにやらないと気が済まない。

聡子　茸、いつごろ完成なの？

橋本　茸じゃないですよ。

英雄　あと一か月くらいかかるかな。

弘三　ずっと手伝うの？

橋本　僕、やることないし。楽しいし。ごはんもつくってもらえるし。

聡子　ここに泊りこんでいるの？

橋本　はい、川の字になって寝て。

聡子　（真紀に）ほんと？

真紀　ええ。

弘三　若夫婦にちっとは遠慮しろよ。

橋本　え？

弘三　いいか、おなかに子供がいるんだし。

聡子　子供がいるからって……。

橋本　子供がいるんですか！

聡子　知ってるかと思った。
橋本　……すみません。僕、今日から納屋で寝ます。
真紀　そんなこと気にしないで。
橋本　覗きませんよ。
聡子　わからないわよ、この人盗撮魔だし。
弘三　この頃撮ってないの。
橋本　忙しくて。
弘三　病気じゃなかったのかい（笑）。
聡子　この間撮ったやつ一枚ちょうだい。
橋本　はい。
真紀　橋本くん、私のは？
橋本　真紀さんのは、ぶれちゃって。
聡子　カメラの腕、たいしたことないのね。
弘三　役人の彼女もほしがってたじゃないか。
橋本　琴子さん、今日あたりくるんじゃ。
聡子　琴子さん？　名前で呼んでるの？
橋本　名前で呼ばれることなんて滅多にないから新鮮だって。
弘三　そういうものかね。
聡子　じゃあ、私も聡子さんって呼んでもらおうかしら。聡子ちゃんもいいわね。
弘三　気色悪い。
聡子（橋本に）いいわよねえ。
橋本　はあ……。
真紀（英雄に）さっき御住職が見えられて。
英雄　今度は何？
真紀　村の寄り合いのお誘い。
英雄　面倒くさいなあ。
真紀　一度挨拶しとかなきゃ。
聡子　奥さんだって、女同士の寄り合いがあるんだし。
真紀（野菜を見せ）こんなのいただいたし。
弘三　檀家からのを回してくれたんだよ。
橋本　ここでもつくればいいのに。叔母さん、あそこで野菜つくってたんでしょ？
英雄　でも霊園になるんだし。
橋本　そのくらいのスペースありますよ。
真紀（橋本に）ねえ、お花は？
橋本　ああ、それいい。平野さん、ガーディ

ニング、僕にやらせてくれませんか？　平野さんのスケッチ、かなり大雑把でしょ。あれをもっとこまかく……。

英雄　いいけど……。

弘三　たのもしいねえ。ニートにしておくのは惜しい。

聡子　社員にしてもらったら？

英雄　給料が……。

橋本　駄目ですよ。僕、仕事になったらたぶん頑張れないです。だからお金なんて考えないでください。ごはんだけ食べさせてくれればいいです。

弘三　そうなると、ますます夫婦の夜が……。

聡子　その心配ばっかり。

真紀　……あの、私たちのことなんですが。

英雄　真紀さん。

真紀　でも……。

琴子、入ってくる。大荷物。

琴子　こんにちは……あ、山口さんも。

聡子　琴子さん、今日から私のこと聡子ちゃんって呼んで。

琴子　は？

弘三　よしなさいって。

聡子　いいわよねえ。

琴子　いいですよ。

聡子　ほら。

弘三　私はこうちゃんなんて嫌だぞ。

聡子　誰も呼びませんよ（笑）。

琴子　（橋本に包みを渡す）はい、頼まれたの。

橋本　サンキューです。

琴子　それからこれ、真紀さんに。

真紀　こんなに？　いいんですか？

琴子　いいの。

聡子　毛糸？

琴子　編み物、私、向いてないんです。そのくせ毛糸ばかり買っちゃって。

聡子　生れてくるのは冬だしね。

琴子　それと、これ（壺を二つ出す）。

弘三　誰の分？
琴子　平野さんの叔母さんの分と。
聡子　もう一つは？
真紀　私の知り合いの分です。
橋本　知り合い？
真紀　親戚の……。
聡子　（英雄に）叔母さんのも？
英雄　お骨と一緒に埋めようかと。
聡子　何、入れるの？
英雄　適当なものがないんですが。
橋本　琴子さん、上手ですよね。
真紀　御住職も褒めてました。
琴子　来たんですか？　反対派でしょ。
聡子　そうでもなくなったみたい。
弘三　首塚のこと教えてくれたよ。
聡子　落武者じゃないみたい。
弘三　一揆のリーダーらしい。
橋本　へえ、かっこいいな。
真紀　でも、ほんとのことはわからないって。
弘三　首が埋まってるかもわからんそうだ。
橋本　何だ、僕、たくさん撮ったのに。
聡子　首塚を撮ったの？
橋本　写るかもしれないと思って。
琴子　心霊写真？
橋本　鎧姿の血まみれの武将とか。
聡子　何よ、それ？
橋本　よくテレビでやるじゃないですか。ほとんどインチキだけど。なかには……。
琴子　記念写真に知らない人が写りこんでいたり、手や下半身が欠けてたり。
弘三　ガラスに反射したものが映ったり、現像や焼きつけのときの作業ミスなんかでそういうのが出てくるんだよ。
橋本　説明できないのも多いと思いますよ。聡子さんは霊とか、信じないんですか？
聡子　……あ？　あ、私のこと？
橋本　自分で呼んでくれって……。
真紀　聡子さんは守護霊が見えるんですよ。
橋本　ほんとですか？
聡子　まあ……。

橋本　だって、ここには僕らの魂、霊がとどまるわけでしょ。霊園ってくらいだから。

聡子　ねえ、霊園なんて呼ぶのよさない？せっかくメモリアルパーク・虹なんて素敵な名前があるんだし。

琴子　平野さんは？

英雄　え？

琴子　霊。

英雄　……。

弘三　霊がついてるかどうかは知らんが、動いたんだそうだ。

橋本　何がですか？

弘三　岩だよ。あの岩は元はもっと端の方にあったそうだ。それが今の位置まで三メートルほど動いたって……十年前に。

橋本　なぜ？

弘三　それがわからない。

橋本　（平野に）知ってたんですか？

英雄　僕が最後にここへ来たのは十年以上前だし。あの岩がどのへんにあったかなんて、そんなの覚えてないよ。

琴子　岩がひとりでに動くわけないわね。

橋本　誰かが動かしたんでしょ。

琴子　何のために？

橋本　やっぱり霊が。

聡子　私は天狗じゃないかと。

橋本　超能力者ですか。

琴子　あの岩は首を埋めた上に置かれてたんでしょ？

弘三　そういうことだな。

琴子　埋められた人の霊が祟ったりしないようおさえつけておくために。

橋本　そうか、そりゃたいへんだ！

聡子　何よ。

橋本　それが動いたってことは、つまり蓋が外れたってことでしょ。おさえがきかなくなるってことだから、こりゃ一大事。

真紀　御住職、何もないって言ってましたよ。

聡子　別に変なことはおきなかったって。

弘三　機械も使わずに動かせるはずがないん

だが、そんなようすも理由もないっていうのが村の連中の言い分だ。

琴子　いいんですか？

英雄　何が？

琴子　戻さなくていいの？

英雄　いいよ、たいへんだもの。

琴子　叔母さん、気がつかなかったのかしら。首塚の一番近くに住んでいたのは平野さんの叔母さんでしょ。

弘三　お供えもしとったらしい。

琴子　首塚が動いたら一番先に気づくし、誰が動かしたのかも知ってたんじゃ。

橋本　実は叔母さんが動かしたりして。

聡子　女の人にあんなもの動かせないわ。

弘三　動かす理由もないだろ。

橋本　……何かが埋まっていたとしたら？

聡子　首が埋まってるんでしょ。

橋本　そんなんじゃなく、財宝のような。

弘三　財宝？

聡子　すごい話になってきたわね。

橋本　叔母さんは首塚にお宝が埋められてることを知った。お供えを欠かさない叔母さんの夢枕に首塚の霊が立ったのかも。「ここに宝があるぞよ。ここ掘れ、ワンワン」

弘三　きみはほんとに二十歳か（笑）。

琴子　だとしても、あれは動かせないわよ。

橋本　できますよ、ジャッキを使えば。

英雄　無理だよ。

橋本　できますよ。ただ、村人に見つからないようにしなきゃいけないから、作業時間は限られている。少しずつ、それこそ一日数センチずつ動かしたんじゃないでしょうか。そうしないと、首塚が動いたことがばれてしまうし。

弘三　畑をするふりをしながら少しずつか……何か月もかかったんだろうな。

橋本　半年くらいかかったりして。

聡子　それで何か出てきたのかしら。

弘三　どうなんだい？

英雄　え？

弘三　叔母さんはただ一人の血縁者のきみに財宝を残して。

英雄　ないです。ない（笑）。叔母は預金通帳一冊残さなかった。この古家と丘の上のあの土地だけです。

聡子　掘ったけど何も出なかったのよ。

琴子　そんなものがあるなら、もっと前に村の人たちが掘り出しているでしょうね。

弘三　もういいだろう（笑）。そんなもののあるはずがない。それよりお昼にしませんか。

聡子　みんなの分もあるわよ。

英雄　どうもすみません。

真紀　お湯、わかします。

琴子　手伝うわ。

英雄（橋本に）身体洗ってこようか？

橋本　そうですね。

真紀、琴子と退場。英雄と橋本も。

弘三　なるほどな。

聡子　何がなるほどなの？

弘三　わかったよ。

聡子　わかったんですか。

弘三　首塚だ。

聡子　何もなかったんでしょ。ほんとはあったんですか。

弘三　首塚の財宝なんてありっこないさ。あるのは私たちのあれだ。

聡子　……まさか。

弘三　高橋の女はやつに頼まれてあれを埋めたんだよ。その上に蓋をした。滅多なことでは開けられない重い蓋を。

聡子　それがあの……。

弘三　間違いない。

聡子　どうするんです。

弘三　どうしたものか。掘り出すにはあの大岩を動かさなきゃならん。

聡子　あの子ができるって。

弘三　できるだろうが、何ていうんだ？　実は本物のお宝がここに埋まっていると教

えてやるのか？

聡子　それは駄目。

弘三　だが彼らの協力なしでは不可能だ。

聡子　少し分け前を出す？

弘三　すんなり協力するとは思えん。金で動くタイプじゃない。

聡子　わかりませんよ、金額次第では。

弘三　坊主や村の連中に気づかれてはまずい。じっくりやるしかないな。

聡子　じっくりって、私たちにはそんなに時間がないんですよ。掘り出す前にこっちが土に埋められちゃう。

戻ってきた琴子、少し聞いていた。

琴子　あの……。

聡子　あ、手伝う？

琴子　いえ、手を洗っていらしたらと。

聡子　そうね。（弘三に）行きましょうか。

琴子　真紀さんが、お天気がいいから丘の上で食べませんかって。

弘三　首塚のそばで？

琴子　ええ（笑）。橋本くん莫蓙運んでます。

聡子　ピクニック気分ね。茸はどのくらい完成したかしら。

弘三　茸じゃないよ。怒られるぞ。

弘三、聡子退場。その後ろ姿をじっとみている琴子。

4

巨大な傘のモニュメントの前。
そばには大きな岩がある。首塚。
昼食後、莫蓙の上で休む六人。

聡子　茸、立派になったわね。

橋本　茸じゃないですよ、これは……。

聡子　これは？

琴子　傘。
橋本　そうです。
弘三　そうか、傘か。
聡子　傘？　雨が降っても平気なように？
　これ休憩用なの？
弘三　実用じゃない。シンボルなんだから。
聡子　（英雄に）傘なの？
英雄　傘というか……傘のようなもの。
琴子　冷たい雨や日差しから私たちの魂が休
　むメモリアルパーク虹を守ってくれる傘。
聡子　この大きさじゃ全部は……。
弘三　実際に覆うかなんて関係ないさ。
聡子　そうなの。
弘三　アートがわからんやつだな。
英雄　住職はお宮にある子授けのシンボルみ
　たいなもんだって。
弘三　熱海の秘宝館なんかにある、男性の？
英雄　（傘の張り出した部分をさし）前はこの
　へんがなかったから。
弘三　今はりっぱな傘だ（笑）。なるほど、こ
　いつは仏様の後光のようにも見える。
琴子　傘は精霊の宿るところ、死者が上って
　いく天。
橋本　僕にとって、傘といえばメリーポピン
　ズ。空を飛ぶ道具です。
琴子　昔、ヨーロッパで若い人たちに窓から
　傘で飛び降りることが流行ったのよ。
英雄　怪我しませんか？
琴子　するわよね。
弘三　自殺願望か。
琴子　そういうのとは違うみたい。
橋本　わかります。傘ってほんとに飛べるよ
　うな気にさせるんです。どこか遠くへ連れ
　てってくれるような。
琴子　オーバーザレインボウ（笑）。
聡子　ちょっと、橋本くん、ここへ立ってみ
　て。（橋本を傘の軸の傍に立たせる）
橋本　何ですか？
聡子　琴子さんは、ここ。
琴子　……（同じく隣に立つ）。

聡子　相合傘。

橋本　遊ばないでくださいよ（笑）。

琴子　相合傘っていいですよね。カップルでいちゃいちゃしているの見ても馬鹿みたいと思うけど、あれだけはうらやましかった……傘の下の二人。「どしゃぶりの町を肩よせ漂流す一本の傘の幸福な遭難」

真紀　幸福な遭難……。

橋本　相合傘のあいあいって、愛するの愛を二つ並べるんですか？

弘三　相手の相と合言葉の合だ。

橋本　ラブラブかと思った。落書きするでしょ。好きな同士をからかって。あれって昔からあるんですか？

弘三　歴史は古いぞ、あれは。

英雄　……中学のとき書かれたんです。クラスで一番きれいだった子と。

橋本　黒板に？

英雄　教室の板壁にマジックで。

橋本　そりゃたいへん。

聡子　でもちょっとうれしい。

英雄　彼女、それを見つけてすぐに消しました。怒りもせず、笑いもせず。

橋本　なかなか消えないでしょ。

英雄　雑巾でふいたぐらいじゃ消えない。普通あきらめます。ところが彼女、鋏をもってくるとガリガリと……板から自分の名前をこそぎおとしたんです。そこに書かれていることが、堪えがたい恥辱かなんかのように。みんな、黙って見ていました……相合傘の片方に僕の名前が残されました。彼女の名前が書かれていたところには醜い傷あとが残っていました。僕は、僕の名前がそんなにも、そんなにもかわいそうに思えたことはなかった。

真紀　英ちゃん……。

橋本　それはそのまま？

英雄　教師に見つかって、僕が怒られて、消すようにいわれました。

琴子　どうして？

英雄　しょうがない。僕の名前なんだから。
橋本　消えたんですか？
英雄　薄くなったけど、完全に消すことなんてできなかった。張り替えてなかったら、まだ残っているかもしれない（笑）。
橋本　その彼女、冷たい人ですね。
聡子　恥ずかしがり屋なのよ。
橋本　削り取ることはないです。隣に書かれた人の気持ちを……。
弘三　所詮、傘は一人で入るもの。二人もいいが、肩がぬれる。
聡子　何言ってるんですか（笑）。
琴子　四人ですよ。
弘三　え？
琴子　傘という字には人が四人。
弘三　（手に書いて）……おお、なるほど。
橋本　（モニュメントをさし）これならもっと入れますよ。十人、二十人だって平気。
英雄　どうして四人なのかな。
琴子　家族じゃないですか。
真紀　家族？
琴子　お父さんとお母さん、そして子供が二人……姉と弟。

橋本、首塚の岩にのぼる。

弘三　おい、いいのか。
橋本　だって何でもないんでしょ。
聡子　お墓の蓋なんだから。
橋本　戻しましょうか。
弘三　君にできるのか。
橋本　僕、造園会社でバイトしたこともあるんです。植木とか庭づくり好きだから。
弘三　危ないだろ。
橋本　いっぺんには無理でも少しずつなら。ここには道具だってあるし。
英雄　道具が？
橋本　あるんです、ジャッキが。納屋に。僕、お二人の邪魔にならないように今夜から納屋に寝ようかなって。それでさっき莫蓙

をさがすついでに中を片づけてたら。

英雄　ジャッキがあったの！

橋本　一番奥に。

聡子　隠してあったの？

橋本　隠したかどうかは。

英雄　じゃあ、やっぱり叔母が……。

橋本　とりあえず動かしてみれば？

琴子　このままでいいわよ。無駄なエネルギーを使わない方がいいわ。これ、雰囲気あるし。この傘のモニュメントと対で、メモリアルパーク虹を守ってくれるって感じ。

真紀　私もそう思います。動かさない方がいい。何となくだけど。

弘三　それは平野さんが決めることだが。

英雄　叔母は何か隠してるかもしれない。

聡子　隠してって、あなた知ってるの。

弘三（聡子に）おいっ！

聡子　隠すって（口ごもり）……。

英雄　叔母が亡くなって遺書が届きました。亡くなったら出すように頼んであったそうです。僕の住所をよく知っていたなって。子供の頃以来、音沙汰なかったのに。遺書にはこの土地とあの家を僕に譲ると書いてありました。田舎の土地ですし、面倒だなって。でも遺骨の始末が……叔母はこの丘に埋めてほしいと。

聡子　まだ埋めてないんでしょ。

英雄　遺書にはこうありました。「遺骨は剣のつけねに埋めてほしい」と。でも剣のつけねの意味がわからなかった。

琴子　剣のつけね……。

英雄　それが首塚をさすんなら納得がいきます。首を切った剣のことか、首塚の主の持っていた剣なのかわかりませんが。

弘三　おばさんが何を隠してると？

英雄　僕の出生についてです。

真紀　英ちゃん。

英雄　僕は母親の子ではなかった。養子です。それがわかったのは母が死んでからです。どこからもらわれてきたのか調べました

が、わからなかった。叔母からの手紙を見て、叔母は知っていると直感しました。でも、そのときはもう亡くなっていたわけだし（笑）。僕がここへ来たのは、仕事が行きづまったこともあるけど、僕の出生について何か手がかりがあるんじゃないかって。家には何もなかった……でも叔母はここに何かを隠したのかもしれない。

弘三　それが君の出生に関するものだと？

英雄　母が死んだとき通知がいったはずなのに連絡もしてこなかった。冷たいなと思ったけれど、別な理由があったのかも。

聡子　叔母さんがなぜ隠すの？

宮坂　隠す理由があったんです。

真紀　御住職……。

宮坂　たぶんこちらだと思って。

英雄　御存じなんですか？

宮坂　平野さん、叔母さんは二十六年前に子供を産んだんです。

真紀　子供を？

宮坂　わしもそんなこと知らなかった。この間、大野のばあちゃんから初めて聞きました。ばあちゃんがとりあげたそうです。ばあちゃん、誰にも内緒にしとった。

聡子　その子供は？

宮坂　その男の子は生れて二か月も過ぎないうちにいなくなったそうです。

真紀　男の子……。

聡子　まさか。

宮坂　ばあちゃんは、佐倉さんが子供を始末したのではと疑って問い詰めると。

弘三　養子に出した。

宮坂　ええ。

橋本　じゃあ、平野さんは。

宮坂　証拠があるわけではないが。

英雄　……そうだったのか。

真紀　英ちゃん、そのこと。

英雄　叔母の子供は赤ん坊の頃に亡くなったって。

弘三　なるほど……まあ、よくあることです。

わかったならいいじゃないですか。もうこんなもの動かさなくても。

宮坂　動かされると困りますか？

弘三　どういうことです？

宮坂　そんなことはないな。動かしたいはずだ。だが、今はまずい。

弘三　いったい何をおっしゃりたいのかな。

宮坂　あなた方御夫婦には以前にお目にかかったような気がしてた。直接でなく、何か雑誌とか新聞とかそういうもので。ずいぶん昔、といっても十年くらい前。

弘三　……。

宮坂　他人の空似ということもあるが。

橋本　（琴子に）何？

琴子　（黙ってというしぐさ）……。

宮坂　あなた方は去年の暮、この村に来ている。そのとき大野のばあちゃんのところへ立ち寄って、佐倉さんのことをいろいろ尋ねたそうですね。特に佐倉さんの家に出入りしていた男のことを。

弘三　……。

宮坂　佐倉さんは亡くなったばかりだった。

英雄　それはほんとうですか？

宮坂　なのに、あなたはこの村に来たのは先月が初めてだといった。なぜ嘘をつくのか。おまけに今度もばあちゃんのところへ立ち寄って、平野さんたちのことを細々聞いたそうですね。ばあちゃん、つい乗せられて奥さんが妊娠してることまでしゃべっちまったらしい……つまり、こういうことです。あなた方は、終の住みかを求めて霊園に入会しようとするただの老夫婦ではない。

弘三　ただ老夫婦でなかったら何なんです。

宮坂　わしは寺へ戻って宗派の広報誌の古いのを引っ張り出した……ちゃんと記事がありましたよ。山口さん、あなたは元幻覚寺グループの管長さんだ。最高幹部だ。そしてこちらの御婦人が教祖様でしたな。だいぶお歳をとられたが、写真のまんまだ。

橋本　幻覚寺グループ！

宮坂　詐欺まがいの霊視商法で有名な……。

聡子　詐欺じゃないわ！

弘三　馬鹿っ！

宮坂　お認めになるんですね。

橋本　驚き、桃の木。

宮坂　あなた方は霊視商法や資産家の相続遺産の詐取等、いくつもの罪で訴えられ、服役し、教団は解散……出所されたんですね。

弘三　もう済んだことだ。とやかく言われる筋合いはない。

橋本　幻覚寺グループか……。

真紀　知ってるの？

橋本　自称霊能者の先生が大勢いたんだけど、実はそれがみんな元避妊具の販売員で。

宮坂　ご高名なお二人がかような過疎の村に何の用があるのか。

聡子　私たちだって終の住みかが。

宮坂　見え透いたことを……わしが推察するに、教団の隠し資産と関係が。

橋本　隠し資産！

弘三　馬鹿馬鹿しい。

宮坂　そいつがここに埋められているんじゃないですか？

弘三　話にならん。

宮坂　他に理由が見当たらないですな……じゃあ、動かしてみればいい。それがてっとり早い。村の連中を呼んでもいいですよ。平野さん、いかがですか？

英雄　住職、ほんとにそんな……。

聡子（大きく溜息）しょうがないわね。

弘三　おまえ……。

聡子　御住職、たいしたもんね……分け前がほしいんでしょ？　あげるわよ。（英雄に）あんたにも。言っとくけど、もう時効なんだから、私たちのものなのよ。

英雄　叔母はなぜそんなものを？

聡子　教団の金庫番が持ち逃げしたの。高橋といってね。あんたの叔母の、違ったわね、あんたの母親の男が。

英雄　叔母の旦那さんが……。

聡子　つまりそいつがあんたの父親。あんたの父親は泥棒。あんたの母親はその片棒をかついだってわけ。

真紀　英ちゃん、駄目！

英雄、聡子につかみかかろうとして橋本に抱きとめられる。

聡子　ほしいんでしょ、お金が。

琴子　もしそんなものがあっても、お二人のじゃないですよ。時効なんてない。元信者や被害者のもの。そしてお国の税金。

弘三　違う、私らのだ。

琴子　私、これでも役人ですよ。税務署にも警察にも知り合い、いますし。

弘三　警察だと！

琴子　御住職、とりあえず警察へ連絡して。

宮坂　あいよ。

聡子　待って！……待ちなさい。

宮坂　何だ、いまさら。

聡子　私はお金のことなんて知らないわ。

弘三　おまえ。

聡子　刑務所へ戻るのはごめんよ。

弘三　だが……。

聡子　お金のことなんて知らない。それでいいんでしょ、それで。

弘三　おまえ。

聡子　どうしようもないわ。

弘三　しかし……。

聡子　（怒鳴る）どうしようもないじゃない！

弘三　……。

英雄　その男はどうしたんだ。

聡子　あなたの父親のこと？

真紀　そんなの、決まってない。

聡子　父親よ。よく見ればそっくり。

弘三　ああ、そっくりだ。

聡子　散々捜したわ。でも行方しれず……あ、もしかしてあんたの母親が。

宮坂　馬鹿なことを。

聡子　馬鹿なことかしら。

弘三　高橋は真面目な男だった。くそ真面目ってやつだ。女なんて縁がある顔じゃなかった。地味で寡黙で信者と関係するようなタイプじゃなかった。すっかり信用してたよ。あんたの母親とどこでどうやって知り合ったのかも知らない。それがあのどさくさにまぎれて横領だ。驚いたよ。私らは捕まるし、金はなくなるし……いいか、私らだって必死になって教団を大きくしたんだ。それなのに何もかもパーで。

聡子　やっとあいつの女の住まいを見つけたと思ったら、女は死んでた。

橋本　お二人はまだそんなにお金が必要なんですか？

弘三　……。

橋本　もう一度教団をつくって教祖様になるんですか？

聡子　そうじゃない、ただ。

弘三　心残りなんだ。刑務所にいてずっとあの金のことを考えてた。そんなことでも考えずに入っていられるものか。

琴子　ないと思いますよ。

弘三　何だと。

琴子　お金なんてない。

弘三　ないはずがない。やつは確かに持ち出したんだ。数億円分の金塊だぞ。

橋本　金（きん）なんですか。

聡子　金の仏像もあるわ。阿弥陀様が。

琴子　（笑う）

弘三　何がおかしい。

琴子　そんな見え透いたことをしますか？

弘三　どういうことだ。

琴子　持ち出した金をここへ持ってきて埋めた。そのあと掘り出されないように、岩で蓋をした。それではあなたたちに、この下に埋めたと教えるようなもの。

弘三　……。

琴子　平野さんの叔母さん……お母さんはそんなことはしないでしょう。

橋本　じゃ、ここには何が。

琴子　息子をなぜ手放したのか、そのいきさつを書いたわび状ぐらいあるかも。

橋本　じゃあ、教団の金は？

琴子　どこか別の場所。

橋本　カムフラージュか。

琴子　ひっかけね。こういう人たちが現れて、岩の下を掘ることで企みが公になることが狙い。

宮坂　つまり、この丘を隅から隅まで掘らないと隠し金は見つからないというわけか。

弘三　そんなことできるか！

琴子　もしかすると、このモニュメントの下あたりかもしれませんよ。

宮坂　そうだな、盗んだものを傘の中に隠す場面が歌舞伎にはよく出てくるぞ。

橋本　ここ、コンクリートでしっかり固めちゃった。

聡子　あんたたちの手にも入らない。

琴子　私たちのものじゃないですし。

聡子　やってみたら？　霊園なんかより儲かるわよ。

真紀　ここは霊園になるんです。メモリアルパーク虹に。

聡子　豪華な霊園だこと。数億の金塊が地中に眠る。

橋本　ロマンがあっていいですね。

弘三　冗談じゃない。

宮坂　で、ほんとにあきらめるんですか？

聡子　もういいわよ、たくさん。

宮坂　信じられんな。

聡子　この歳になると、これ以上の面倒には堪えられない。

琴子　メモリアルパークの入会は？

聡子　やめとく（笑）。その金で海外旅行とはいかなくても温泉にでもいくわ。ねえ？

弘三　そうだな。

聡子　（英雄に）あんた、たいへんよ。こういうのをやるのって。

弘三　アクセスが悪すぎる。

聡子　人がいいんじゃやってられないの。こういう人の弱い心につけこむ商売ってのは。御住職、そうでしょ？

宮坂　私はつけこんじゃいない。檀家だってわずかだし。

聡子　お寺さんも私たちも似たようなものよ。やり方がちょっと違うだけで。

宮坂　……。

聡子　（琴子に）ねえ、あの壺なんだけど。あれ、記念にくれない？

琴子　どうぞ。

弘三　おい。

聡子　ありがと。いただいていくわ。

真紀　あの……。

聡子　何？

真紀　牛乳瓶の底、なんですが。

聡子　牛乳瓶？

真紀　守護霊の。

聡子　ああ、あれ。あんなこといつもやってたの。私、教祖様だったから。

真紀　見えたんですか。

聡子　心あたりがあるの？

真紀　……。

聡子　霊感なんてないわ。適当に言っただけ。

真紀　そうですか。

聡子　その子の父親？

真紀　……。

聡子　やっぱり。

弘三　何がやっぱりなんだ。

聡子　いいのよ、あなたは。

弘三　……帰るか。

聡子　守護霊なんていないわ。でもあなたには、ちゃんと傘をさしかけてくれる人がいるじゃない。

真紀　……。

聡子　（モニュメントを見上げ）外国の言い伝えではね、傘は妊婦を災難から守ってくれるんだって。

真紀　……。

聡子　守護霊なんていない。

弘三　行くぞ。

聡子　いい子を産むのよ。

二人、退場。

宮坂　ほんとにあきらめるかな。

琴子　どうでしょうか。

橋本　数億円とか言ってましたもんね。そう簡単にあきらめないんじゃ。まあ、今日のところはいったん退却ということで。

琴子　でも顔は知られちゃったし。

宮坂　都会ならともかく、こんな村ではまた現れたらすぐわかる。

英雄　僕らがいなくなるのをじっと待つんじゃないんですか。

宮坂　根競べかい？　だったら年寄りには分が悪い（笑）。

橋本　わかりませんよ。あの人たち長生きしそうだ。

宮坂　しかし、佐倉さんのところにジャッキがあったとはな。

橋本　嘘です。納屋にそんなものありませんよ。使ったことあるなんてのも嘘。造園やろうと思ったのはほんとですけど。

琴子　どうしてそんな嘘ついたの？

橋本　思わず……。

琴子　思わず？

橋本　誰かが言わせたんです。守護霊かな？

琴子　ごまかして（笑）。

橋本　そういうことってありますよね？

宮坂　そうだな。わしの嘘も咄嗟に出てきたもんだから。

琴子　首塚のことでしょ。

宮坂　わかってたか。

橋本　何？

琴子　首塚が動いたなんて嘘だってこと。

橋本　えーっ！

宮坂　あれは昔からあそこだ。

橋本　じゃあ、教団の金は？

琴子　あるかも知れないし、ないかもしれな

い。あったとしても、平野さんのお母さんが手がかりを残していなければ見つからないわ。

宮坂　それこそこの丘を全部掘り返せば出てくるかも知れんが。

琴子　そんなことしたら金塊より高くついてしまいますよ。それに自分のものになるかもわからないし。

橋本　メモリアルパーク・虹の地下には金塊が埋まっている。時価数億円。これ、キャッチコピーにどうかな。

宮坂　よせよせ、本気にするやつがいるかもしれん。

真紀　……私も、私たちも嘘をついてました。

英雄　……。

真紀　私と英ちゃん、夫婦じゃないんです。

宮坂　ああ。

琴子　それ、何となく。

橋本　僕も。ちょっと変だなって。

宮坂　子供の父親は？

英雄　亡くなりました。

琴子　牛乳瓶眼鏡の人？

真紀　……私、どうしたらいいかわからなくて。そしたら英ちゃんが。

宮坂　そうか、夫婦じゃないのか。

英雄　すみません。

宮坂　……平野さん。

英雄　はい。

宮坂　あのさ……大野のばあちゃんに、佐倉さんに子供がいたことを聞いたとき、わし、ちょっとあせったんだわ。

英雄　え？

宮坂　あの時分、何ていうか、その、こんなことというのも何だが、まあ、ここらの村では昔からごく普通に行われていたことなんだが、その……。

琴子　夜這い？

橋本　夜這い！

宮坂　わしもまだ若くて……。

英雄　叔母……母とですか。

宮坂　だから気になって。
橋本　もしかして住職が平野さんの……。
宮坂　でも違っていたようだ。
英雄　らしいですね。
宮坂　村では普通に、その……（真紀に）あ、今はないからそんなこと。
英雄　村の人と全然つきあいがなかったわけじゃないんだ。
宮坂　まあ、つきあいというか。
英雄　僕をとりあげた産婆さん……。
宮坂　大野さんとこのばあちゃんか。
英雄　赤ん坊の頃のこと、覚えてないでしょうね。
宮坂　……背中に。
英雄　背中。
宮坂　背中にやけにはっきりした黒子があったそうだ。
英雄　あったんですか。
宮坂　あるの？
英雄　背中ですから。
橋本　見えませんよね。
宮坂　そういや佐倉さんの胸にも……。
橋本　胸？
宮坂　あ、ごめん。
英雄　やっぱり僕……。
真紀　英ちゃん。
宮坂　……じゃ、わしはこれで。（英雄に）寄り合い、待ってるから。

宮坂、退場。

琴子　みんな嘘ついてたんだね。
真紀　……。
琴子　それがどんどんばれちゃった……でもまだあるよね。
英雄　……。
琴子　疑問その一。平野さんはなぜメモリアルパークなんてつくろうとしたのか。広い土地を相続したからって、なぜ？
英雄　ここは……。

琴子　平野さんのような若い人が霊園なんて絶対おかしい……私、考えたの。ここに何かを隠すつもりじゃなかったのかって。

橋本　隠す？

琴子　そう。何か。

橋本　何ですか、それ？　隠し資産？

琴子　それはない（笑）。でもどこに隠したかはわかる。

橋本　それって……。

琴子　そう。

橋本　（傘を指し）この下？

琴子　疑問その二。なぜこのモニュメントばかり急いでつくる必要があったのか。他にやることがいっぱいあるのに。平野さんはこの下に隠したんじゃないか。メモリアルパークがある限り、掘り返されることはないから。

橋本　何なんですか？

琴子　最初、それは私の父だと思った。でも違うみたい。

英雄　父？

琴子　戸田は母の旧姓。私の本名は高橋琴子。

橋本　もしかして……。

琴子　金を持ち逃げした幻覚寺グループの会計担当、高橋織男の娘。

英雄　……。

琴子　（英雄を見つめ）ほんとそっくり。

英雄　……。

琴子　父の消息をずっと追ってたの。出所した教祖夫婦をマークすれば何か手がかりがつかめるんじゃないかって。

橋本　異母姉弟か……。

琴子　初めて会ったときどきっとした。でもまさかと。

英雄　母はあなたのお父さんを。

琴子　どうなったか知りたかっただけ。どうやら教団の金塊と一緒にこの丘のどこかで眠ってるみたいね。あなたのお母さんがほしかったのはお金じゃなくて父。きっと丁寧に葬ってくれたんだろうと思う。

橋本　じゃあ、（モニュメントをさし）この下には？

英雄　何もない。

琴子　二人が夫婦じゃないことは薄々感じてた。そのとき思ったの。もしかするとそこにいるのは真紀さんの。

英雄　違う。

琴子　木は森に隠せ。

橋本　……真紀さんのアパートを見つけました。でも、そのときはもぬけの殻だった。大家さんも行く先は御存じなかった。ただ、同じ頃、隣の部屋の住人も出て行った。それが平野さんです。しかも平野さんは真紀さんと、そして真紀さんの部屋に出入りしていた牛乳瓶眼鏡の男と仲がよかった。

真紀　橋本くん……。

橋本　真紀さんはもしかすると平野さんと一緒ではないかと思いました。それで平野さんを探すことにしました。

英雄　ホームページか……。

橋本　平野英雄なんてよくある名前なんです。霊園の管理人なんて絶対違うと思った。全く期待しないでここへ来ました……それがビンゴ（笑）……でも人違いかもしれない。真紀さんの顔、知りませんから。それで写真を撮りました。あのときの写真、大家さんに送って確認してもらいました。

琴子　シャッターチャンス症候群なんて、嘘くさかった。

真紀　あなたは？

橋本　弟です。菅原美恵子の弟です。義兄は、菅原孝は病院を抜け出し、あなたのところへ行ったんでしょ。最期のときをあなたと過ごすために……それはいいんです。姉とはすっかり駄目になっていましたから。あなたに看取ってもらった方がいい。姉もそう言ってました。でも妻として、せめて葬ることぐらいは自分でしたかったと。

真紀　ああ……。

橋本　あなたは義兄の心だけでなく、遺体ま

で姉から……。

英雄　僕がそそのかしたんだ。

真紀　英ちゃん。

橋本　おかげで姉は自分を捨てた男に恨みつらみをぶつけることもできなかった。許すこともできなかった。冷え切った夫婦にも何年かの幸福な時があったはずです。それすらもすべてなかったような、すべて夢、すべて嘘のような気がすると言いました……姉が可哀相でした。

真紀　……。

橋本　哀れな姉のために、義兄をとりかえしてやろうと思ったんです……でも僕はそうとも知らずに、モニュメントの土台をしっかりと固めてしまったんですね（笑）。

英雄　僕のせいだ。菅原さんを葬るところならあるからって。

真紀　……彼はアパートに着いて一時間もたたずに息を引き取りました。最後の力をふりしぼって私のもとへ来てくれたんです。私は、そんな彼を奥さんに返すことなんてできなかった。

英雄　布団袋に入れてレンタカーでここまで運んだ。

橋本　ここはメモリアルパークですもんね。でもそんな話、姉にはできない。

琴子　……母は父の行方に関心がなかった。

英雄　お父さんは……。

琴子　かわいがってくれた。裏切られたとは思わない。母からは得られなかった安らぎをよその人に求めたとしてもそれは責められない。教団の仕事も好きでやっていたんじゃなかった。逃れたかったんでしょうね。教団がガタガタになったときにきっとキレちゃったんだ……父の形見も父と一緒に写っている写真もすべて母が捨ててしまいました。父の痕跡は何ひとつ残さず。でも私にはいい父親だった。いろんなこと教えてくれた。やさしい人だったんです。でも何も残っていない。私の記憶の中にだ

け……ああ、違うわ。弟がいたのね（笑）。

橋本　（真紀に）……子供のこと、義兄さんは知っていたんですか？

真紀　あの人には伝えないつもりでした。でも病院から最後の力をふりしぼって抜け出してきたあの人に、もう時間がないあの人に伝えずにはいられなかった。

橋本　希望？

真紀　希望なんてない。あの人の体に奇跡が起こることなんて。心残りです。心を残してほしかった。だから、だからずっと子供と一緒にいてほしかった。

橋本　義兄は最後に何と？

真紀　何も……。

橋本　何も。

真紀　ただ大きくうなずいて、それっきり。

琴子　（英雄に）あなたは？

英雄　え？

琴子　あなたもいたんでしょ、その場に。

英雄　僕は……。

琴子　託されたんじゃないの？　教祖様も言ってたけど。

英雄　……。

琴子　名前ぐらい……子供の名前ぐらいつけていけばよかったのに。

真紀　名前……。

英雄　真紀さんの部屋に呼ばれて三人でよく飲んだ。弟のようにかわいがってくれて、僕は兄弟がいないからそれがとても心地よくて。僕らのアパート、風呂がなかったから一緒に銭湯へいった。菅原さん、僕の背中を洗ってくれた。そのときこういったんだ。「英ちゃん、君の背中には大きな黒子が並んでるよ。これってまるで星座みたいだね」って。僕は叔母の胸のことを思い出した。叔母の胸に並んだ黒子のこと。カシオペアのかたちを。

琴子　見てあげる。

英雄　え？

琴子　背中。

英雄　……。

琴子　見せて。

英雄、シャツを脱ぐ。

琴子　……ペルセウス。

橋本　ペルセウス？

琴子　ギリシア神話の英雄。ゼウスの子どもで、生贄にされそうになったアンドロメダ姫を海の怪物から救うの。

橋本　どこがどうなってるのやら……。

琴子　ほら、こんなにはっきり。

橋本　琴子さん、こういうのも詳しいんだ。

琴子　父に教えてもらったの。父が好きだったから。琴子は琴座から。

英雄　僕の名前は……。

琴子　父がつけたのね。英雄、ペルセウス。

英雄　ペルセウス。

琴子　赤ん坊のあなたの背中を見て思いついたのよ。父らしいわ。ペルセウスは八月に大流星群が飛ぶの。父と二人で屋根に上って観測したことがある。

橋本　琴子さんのお父さん、ほんとうにこの丘に眠ってるんでしょうか？

琴子　剣のつけね。

英雄　……。

琴子　そう書いてあったのよね、遺書には。剣のつけねに埋めてほしいと。

英雄　そうか、ペルセウスの剣だ。

琴子　そう。ペルセウスの。

橋本　何？　何なの？

琴子　佐倉さんはこの丘に金塊と父を埋めたの。その場所を息子の英雄さんに教えようとした。そこに自分も埋めてもらいたいから。そして金を見つけてもらいたいから。

橋本　それが、これと？

琴子　ペルセウスの剣のつけねに有名な二重星団、星の集まりがあるの。おそらくそれをさしているんだわ。

橋本　（英雄の背中をさし）つまり、これ、宝

の地図？　でもどうやってその位置を知るの？　目印になるものでもなければ。

琴子　ペルセウスが左手に持つメデューサの首。変光星アルゴル。

英雄　首……首塚か！

橋本　首塚が起点になるとしても、もう一か所、特定できないと。

英雄　……カシオペアだ。

琴子　そう、あなたのお母さんの胸の星座。ペルセウスのすぐそばで見守っているカシオペア。

英雄　（指さして）あの家のことだ……。

琴子　カシオペアのβ星シェダールは王妃の胸を示す星。それを結べば……。

英雄　位置がわかる。

琴子　こんなややこしい隠し場所を考えたのは父でしょう。そしてあなたのお母さんは同じ場所に父を。

橋本　……掘るんですか？

琴子　ううん。もういいの。

橋本　平野さんは？　金が……。

英雄　僕のじゃない。

橋本　そうですか……。

琴子　橋本くんは？（モニュメントの土台をさし）

橋本　……僕もいいです。

真紀　ごめんなさい。

橋本　義兄にはここが安住の地だと思います。ここにいて、牛乳瓶眼鏡の守護霊になって、生れてくる子供を見守るんでしょう。

琴子　（英雄に）どうするの、これから。メモリアルパーク虹は。

英雄　入会しようなんて人はきっともう現れない……だったら、だったらここは、僕らの父親と僕の母親、そして菅原さん。三人のためのお墓でいい。

琴子　もう一人いるわ。

英雄　もう一人？

琴子　首塚の主。

橋本　四人ですね。

琴子　そう、傘の下には四人。

雨音。

モニュメントを見上げる四人。

雨音段々激しく。

了